

宮城県文化財調査報告書第 211 集

東北地方整備局関連遺跡 発掘調査報告書

平成 19 年 3 月

宮城県教育委員会
仙台河川国道事務所

東北地方整備局関連遺跡
発掘調査報告書

序 文

新たな世紀を迎え、ゆとりや豊かさを目指すことが重要になってきたなかで、地域住民の間では身近な地域の個性豊かな風土や歴史的な文化財の保存・活用の取り組みへの気運が高まっています。

しかし、一方では道路建設や宅地造成など都市化の波が地方にも押し寄せ、大規模なほ場整備などの各種開発事業も年を追うごとに増加しており、文化財は年々破壊され、消滅の危機にさらされることが多くなってきています。なかでも土地との結びつきの強い埋蔵文化財は、各種の開発により常に破壊される恐れがあることから、当教育委員会では開発部局等に遺跡の所在を周知徹底するとともに、開発との関わりが生じた場合には貴重な文化財を積極的に保護することに努めてきております。

本書は、国土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所との保存協議に基づき、三陸縦貫自動車道及び仙台北部道路の建設と一般国道4号拡幅工事に先だって実施した登米市布目遺跡、黒川郡富谷町菅ノ沢遺跡、黒川郡大衡村旧大衡役場前遺跡の発掘調査報告書です。本書が広く県民の皆様や各地の研究者に活用され、地域の歴史解明の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、遺跡の保存に理解を示され、発掘調査に際しては多大なるご協力をいただいた関係機関の方々、さらに実際の調査にあたられた皆様に対し、厚く御礼申し上げる次第です。

平成19年3月

宮城県教育委員会

教育長 佐々木 義昭

例　　言

1. 本書は、国土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所との協議に基づき実施した、三陸縦貫自動車道桃生登米道路建設に伴う「布目遺跡」、仙台北部道路建設に伴う「菅ノ沢遺跡」、一般国道4号富谷大和拡幅工事に伴う「旧大衡役場前遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 調査は、宮城県教育委員会が主体となり、宮城県教育庁文化財保護課が担当した。
3. 発掘調査および資料整理・報告書の作成に際しては、以下の機関からご協力を賜った。
　　登米市教育委員会、富谷町教育委員会、大衡村教育委員会
4. 本書の2頁第1図は、国土交通省国土地理院発行の「米谷」「登米」、41頁第1図は、「根白石」「富谷」、50頁第1図は、「七ツ森」「吉岡」の縮尺1/25,000の地形図を複製して使用した。
5. 本書で使用した測量原点の座標値（第X系）は以下のとおりである。
　　布目遺跡：X=—147343.833　Y=37530.778（世界測地系）
　　菅ノ沢遺跡：X=—180529.758　Y=5181.277（世界測地系）
　　旧大衡役場前遺跡：X=—171118.893　Y=3967.412（世界測地系）
　　平面図中の地区割り：S20、E20などの表記は、原点から南に20m、東に20mの位置にあることを示している。なお、方位は座標北を表している。
6. 本書で使用した遺構略号は以下の通りである。遺構番号は、遺構の種別に関わらず、調査の際に付した通し番号を用いている。
　　SB：掘立柱建物跡　SE：井戸跡　SK：土壙　SD：溝跡　SX：竪穴状遺構・遺物包含層・その他
　　7. 遺構平・断面図にはそれぞれスケールを付しているが、縮尺は原則として以下の通りである。
　　調査区全体図：1/1000・1/600　遺構配置図：1/200・1/300
　　井戸跡・竪穴状遺構・土壙・溝跡：1/60　掘立柱建物跡：平面図1/100・断面図1/60　遺物包含層：1/100
8. 土色の記述にあたっては、「新版 標準土色帖 1994年版」（小山・竹原 1994）を用いている。
9. 本文中で使用した「灰白色火山灰」は、現在、10世紀前葉頃に降下したものと考えられている（白鳥 1980、井上・山田 1990）。
10. 遺物図版にはそれぞれスケールを付しているが、縮尺は原則として以下の通りである。
　　土器類・木製品・金属製品：1/3　石製品・石器：2/3（礫石器のみ1/3）
11. 遺物実測図では、土師器黒色処理はグレー着色によって区別した。
12. 本書における土師器の記述については必要に応じ、製作にロクロを使用したものを「ロクロ調整」、使用しないものを「非ロクロ調整」と表記している。
13. 遺構・遺物の整理は、佐藤憲幸、小野章太郎、農村幸宏、森 幸子、木村奈保美が行った。
14. 本書の執筆・編集は、調査担当者との協議の後に佐藤憲幸、小野章太郎が行った。
15. 本遺跡の調査成果については、文化財保護課ホームページなどでその内容の一部を公表しているが、これらと本書の内容が異なる場合は、本書がこれらに優先する。
16. 発掘調査の記録や出土遺物は、宮城県教育委員会が保管している。

目 次

序 文

例 言

目 次

【布目遺跡】

目 次

調査要項

第Ⅰ章	調査に至る経過	1
第Ⅱ章	遺跡の概要と周辺の遺跡	1
第Ⅲ章	発掘調査	2
1. 調査の方法と経過		2
2. 基本層序		3
3. 発見された遺構と遺物		4
(1) 井戸跡 (2) 土壌 (3) 遺物包含層		
第Ⅳ章	まとめ	24
参考文献		24
写真図版		25

【菅ノ沢遺跡】

目 次

調査要項

第Ⅰ章	調査に至る経過	41
第Ⅱ章	遺跡の概要と周辺の遺跡	41
第Ⅲ章	発掘調査	42
1. 調査の方法と経過		42
2. 発見された遺構と遺物		43
参考文献		43
写真図版		45

【旧大衛役場前遺跡】

目 次

調査要項

第Ⅰ章	調査に至る経過	49
-----	---------	----

第Ⅱ章	遺跡の概要と周辺の遺跡	49
第Ⅲ章	発掘調査	51
1. 調査の方法と経過		51
2. 発見された遺構と遺物		56
A 古代		
(1) 掘立柱建物跡 (2) 壴穴状遺構 (3) 土壙		
B 近世		
(1) 区画溝跡 (2) 掘立柱建物跡 (3) 井戸跡		
第Ⅳ章	考察	71
第Ⅴ章	まとめ	72
参考文献		72
写真図版		73
報告書抄録		

布目遺跡

—三陸縱貫自動車道建設関連遺跡調査報告書VIII—

目 次

第Ⅰ章 調査に至る経過	1
第Ⅱ章 遺跡の概要と周辺の遺跡	1
第Ⅲ章 発掘調査	2
1. 調査の方法と経過	2
2. 基本層序	3
3. 発見された遺構と遺物	4
(1) 井戸跡 (2) 土壌 (3) 遺物包含層	
第Ⅳ章 まとめ	24
参考文献	24
写真図版	25

調査要項

1. 遺跡名 布目遺跡（宮城県遺跡登録番号：52007 遺跡記号：R G）
2. 所在地 宮城県登米市登米町日野渡字日野渡地内
3. 調査主体 宮城県教育委員会
4. 調査担当 宮城県教育庁文化財保護課 佐藤憲幸 豊村幸宏 小野章太郎
5. 調査期間 平成 18 年 4 月 24 日～6 月 16 日、11 月 6 日～11 月 17 日
6. 調査面積 約 2500m²

第Ⅰ章 調査に至る経過

本書は、三陸縦貫自動車道桃生登米道路建設工事に伴って平成18年度に実施した登米市布目遺跡の発掘調査報告書である。

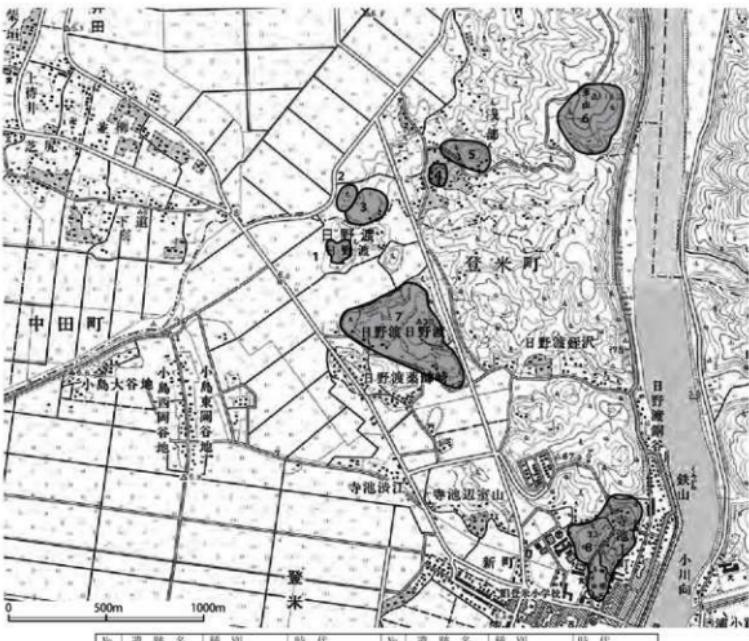
太平洋沿岸の仙台市を起点として岩手県宮古市に至る三陸縦貫自動車道路整備事業計画が立案・検討される中で、三陸縦貫自動車道「矢本石巻道路」に続き、北に接続する同「桃生登米道路」については平成17年度から工事に着手する事業計画が決定した。この「桃生登米道路」は、桃生IC（仮称）を起点に、石巻市、登米市の両市内をほぼ北上川右岸に沿って北上し、旧北上川やJR気仙沼線を横架して、旧登米町と旧中田町との町境にほど近い登米IC（仮称）に至るものである。事業計画では、幅23.5mの4車線を整備するにあたり、地形の起伏に沿って大規模な切土や盛土を行つものであった。そのため、宮城県教育委員会と国土交通省東北地方整備局は協議を重ね、分布調査を実施して新たな遺跡の有無を確認するとともに、予定路線の範囲に含まれる周知の遺跡については確認調査を実施して、遺跡保存と道路整備事業との調整を図ってきた。協議の結果、発掘調査を実施する必要が生じた遺跡は石巻市八幡遺跡、登米市布目遺跡の2遺跡と、平成17年度の工事中、縄文時代や古代の遺構・遺物が新たに発見され、遺跡範囲の拡大が判明した石巻市山居遺跡の計3遺跡が調査の対象となった。

発掘調査については、「矢本石巻道路」発掘調査に続き、平成16年度は八幡遺跡、平成17年度には山居遺跡の事前調査を実施し、これと並行して平成17年8月29～31日に布目遺跡の確認調査を行った。この確認調査において縄文時代及び古代の遺物包含層や時期不明の柱穴、土壙等が検出され、また、遺跡範囲が從来想定されていた範囲よりも南北側に延びることが判明したことから、今回の事前調査を実施することとなったものである。

第Ⅱ章 遺跡の概要と周辺の遺跡

布目遺跡は、宮城県北部の登米市登米町日野渡字日野渡に所在する。遺跡が所在する宮城県北部の地形をみると、東側の海岸部には北上山地が、西側には奥羽山脈が南北に走り、中央部を北上川が南流している。その中で登米市登米町は県北東部にあり、町の中央部を北上川が南流し、西部は迫川と北上川によって挟まれた仙北低地帯の東縁部にあたる。ここには巻地区から寺池地区にかけて、北上川西岸に沿って南北に長い、標高110m程の北上山地の分離丘陵があり、遺跡はこの丘陵の中央西端部に位置している。

布目遺跡は工事にともなう平成14年度の分布調査の際、新たに発見された遺跡である。同一丘陵上には縄文時代の遺跡や中・近世の城館跡が8箇所存在し（第1図）、本遺跡から北西に約200m離れた浅部貝塚では、昭和41年に東北大大学文学部考古学研究室が中心となって発掘調査が行われており、縄文時代前期の土器、石器、骨角器等が採集されている（中田町史編纂委員会：1977 林：1970・1971）。また、寺池館跡では、平成元年に宮城県教育委員会による発掘調査が行われ、礎石建物跡、掘立柱建物跡、池跡等が検出されている（宮教委：1990）。



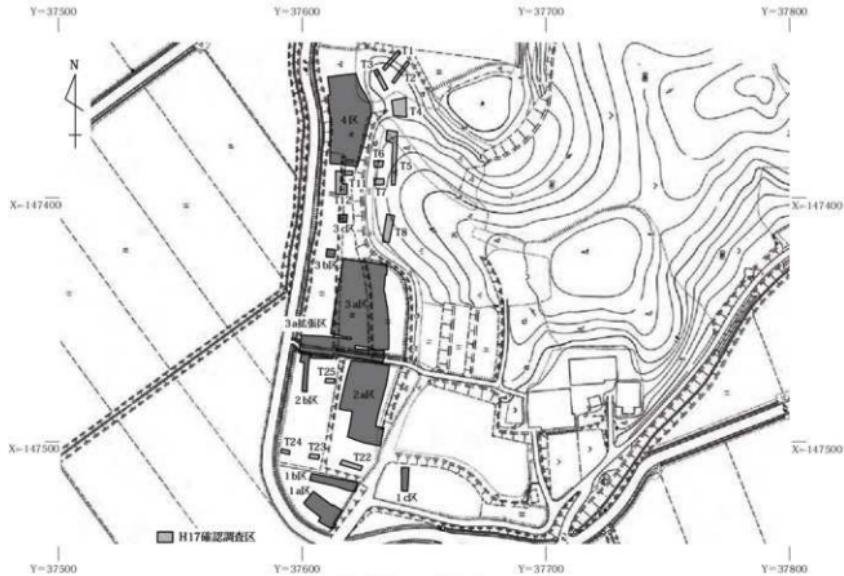
第1図 布目遺跡と周辺の遺跡

第Ⅲ章 発掘調査

1. 調査の方法と経過

平成17年8月29～31日の確認調査の結果を基に、遺構が確認された丘陵西側裾部に大小計9箇所のトレンチを設定した。また、丘陵頂部にある畜舎への進入路が調査区内にかかっており、進入路確保のため、この部分の約250m²については付け替え道路設置後に行うこととした。確認調査を含め、総調査面積は約2500m²である。調査区は西側から入り込む数カ所の沢を中心に南から1～4区に大別し、トレンチが複数ある地点は更にa～cに細別して区名を付している。

発掘調査は平成18年4月24日から開始し、はじめに南側の調査1区から順次、5月8日まで重機による表土除去作業を行った。その結果、井戸跡10基、土壌4基、遺物包含層1箇所等が検出され、表土除去作業が終了した調査区から直ちに精査を開始した。5月9日以降は精査と平行して調査区及び構造の実測・写真撮影を行い、6月16日、畜舎進入路部分を除く、すべての調査を終了した。また、



第2図 調査区の位置 (S=1/2000)

調査も終了に近づいた6月7日には地区指導員や登米市文化財保護委員を対象とした遺跡の概要報告を行っている。畜舎進入路部分については付け替え道路設置後の11月6日から調査を開始し、重機による表土除去後、井戸跡6基、土壙3基などを発見し、順次、遺構の精査・実測を行い、11月17日に調査を終了した。

遺構等の平面図の実測に際しては、工事用基準杭 H11-26 をもとに任意の測量原点を設定して、電子平板による測量作業を行った。また適宜 1/20 の縮尺で断面図を作成し、併せて行った写真撮影では 1000 万画素クラスのデジタルカメラや 6 × 7 の中判カメラを使用した。

測量原点の国家座標は例言で示した通りである。

2. 基本層序

今回の発掘調査区は、南北に延びる低平な丘陵の西側裾部と、それと接する沢地部分に設定されている。現況は休耕田で、過去の開田工事の際に削平を受けており、これにより細部において各地点毎に堆積状況や残存状況に多少の相違が認められたものの、大筋では基準となる層を中心にはほぼ同じ層序を示している（第3図）。各層の特徴は以下の通りである（表1）。

調査区全体で第1～13層（地山）まで確認した。1区では1～3・7～11・13層、2区では1～3・7～11・13層、3区では1～13層、4区では1・4・7～11・13層を確認している。これらのうち、7～9層が古代以降の遺構確認面、13層が地山で縄文時代の遺構確認面である。地形は縄文時代に

において概ね西側に大きく傾斜しているが、その後、7～9層が斜面下方に向かって急激に厚く堆積しており、古代においてはほぼ平坦な面が形成されている。

表1

層位	土色	土性	層厚(cm)	遺人物	その他	遺物収上順
1	調査区全体を覆う表土や水田耕作土と床上					1
2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	55.0(aK)	小礫・砂粒・マンガン粒・炭化物粒		2
3	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト	35.0(aK)	砂粒・マンガン粒・炭化物粒		3
4 a	黒褐色(10YR3/1)	シルト質粘土	30.4(k)	砂粒・酸化鉄斑・シングル・炭化物粒	古代の遺物包含層。	4
b	灰褐色(10YR4/2)	粘土質シルト	15.0(k)	砂粒・炭化物粒を僅少	特にII区SX39周辺で遺物が集中する。	5
c	にふい 黃褐色(10YR7/2)	砂質シルト	25.0(aK)	灰白色火山灰ブロック含む		6
d	黒褐色(10YR3/2)	シルト	30.0(aK)	小礫・砂粒・マンガン粒・炭化物粒		7a
e	黒褐色(10YR2/3)	粘土質シルト	25.0(a-4)k	砂粒・酸化鉄斑・シングル・炭化物粒		7b
5	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト	20.0(aK)	砂粒・酸化鉄・マンガノリ・炭化物粒		7c
6	暗褐色(10YR3/3)	粘土質シルト	30.0(aK)	小礫・砂粒・酸化鉄・シングル・炭化物粒		7d
7	灰褐色(10YR4/2)	粘土	25.0(aK)	酸化鉄・砂粒・マンガン粒・炭化物粒	古代以前の遺構確認面	8
8	灰褐色(10YR5/2)	粘土	25.0(k)	酸化鉄・マンガノリ多量		9
9	にふい 黄褐色(10YR4/3)	粘土	105.0(aK)	酸化鉄・砂粒・マンガン粒・炭化物粒		10
10 a	黒色(10YR2/1)	粘土質シルト	30.0(aK)	酸化鉄・砂粒・マンガン粒・炭化物粒	縄文前期の遺物包含層。	11a
b	黒褐色(10YR2/2)	シルト	35.4(k)	酸化鉄・砂粒・シングル・炭化物粒	特にII区SX39周辺で遺物が集中する。	11b
c	黒褐色(10YR2/3)	粘土質シルト	30.0(aK)	酸化鉄・砂粒・シングル		11c
11	灰褐色(10YR4/2)	砂質シルト	65.0(aK)	酸化鉄・砂粒・マンガン粒・炭化物粒		12
12	にふい 黄褐色(10YR4/3)	シルト	25.0(aK)	砂粒多量 炭化物粒・酸化鉄・マンガン粒		13
13	にふい 黄褐色(10YR5/4)	シルト質粘土		酸化鉄・マンガン粒	地山	14

3. 発見された遺構と遺物

今回の調査で検出した遺構は、井戸跡 16 基、土壙 7 基、遺物包含層 1箇所、ピットなどである。遺物については、遺物包含層を中心に、井戸跡、土壙などの堆積土中等から、繩文土器、土師器、須恵器、石器などが整理用コンテナで 15 箱出土している。以下、精査をおこなった遺構について説明する。

(1) 井戸跡

16 基検出した。すべて素掘りの井戸跡で、重複なく、ほとんどが円弧状に列をして検出されており、ほぼ一連の時期に掘り込まれたものと考えられる。時期は出土遺物に乏しいため詳細な検討は困難であるが、SE21・31以外はすべて基本層位第9層上面で確認されており、井戸の底面近くには基本層位第3・4層起源と考えられる黒褐色土やそれらがグライ化したと考えられる暗緑灰色土等が自然堆積しているものが多く、これらとの内 SE31・34・35・36 井戸跡には崩落による2次堆積と考えられる灰白色火山灰の小ブロックが底面付近に認められることなどから、概ね古代末から中世頃のものと推定される。

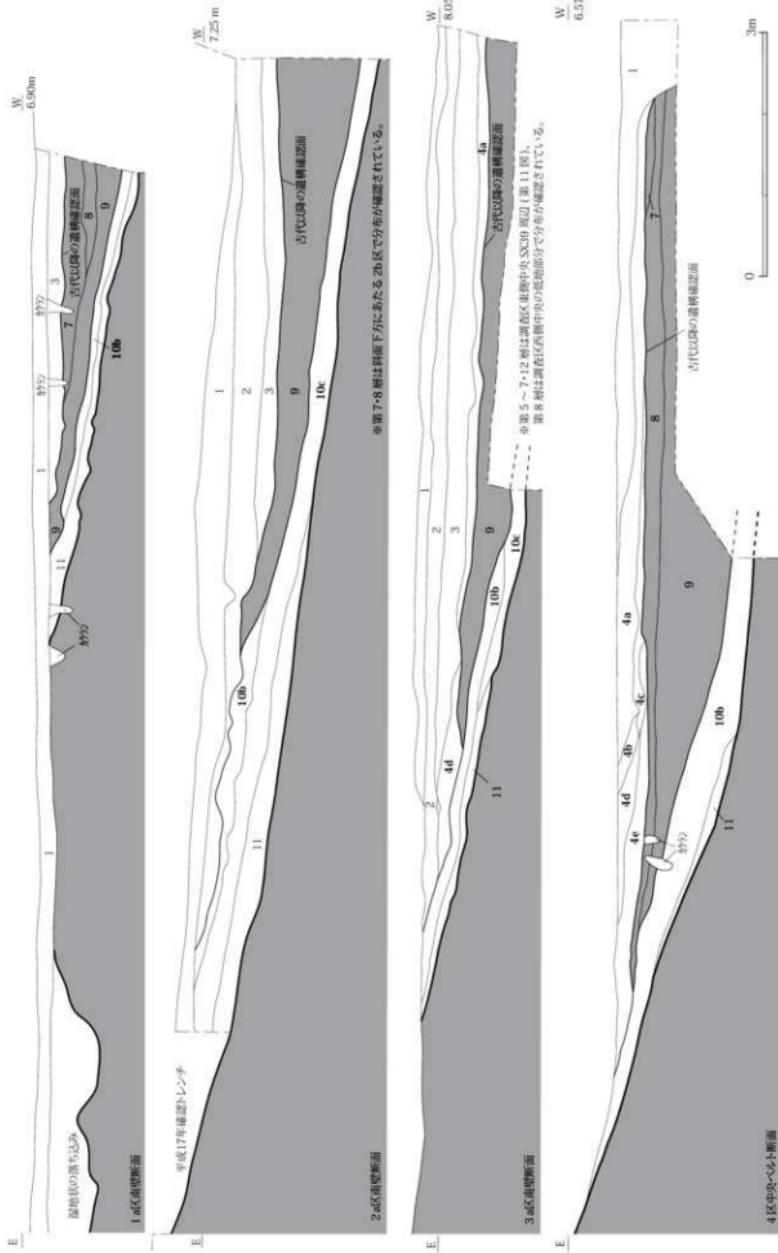
【SE21 井戸跡】(第4・6図)

【位置】 2a 区北東側 [確認面] 地山 (基本層位第 13 層)

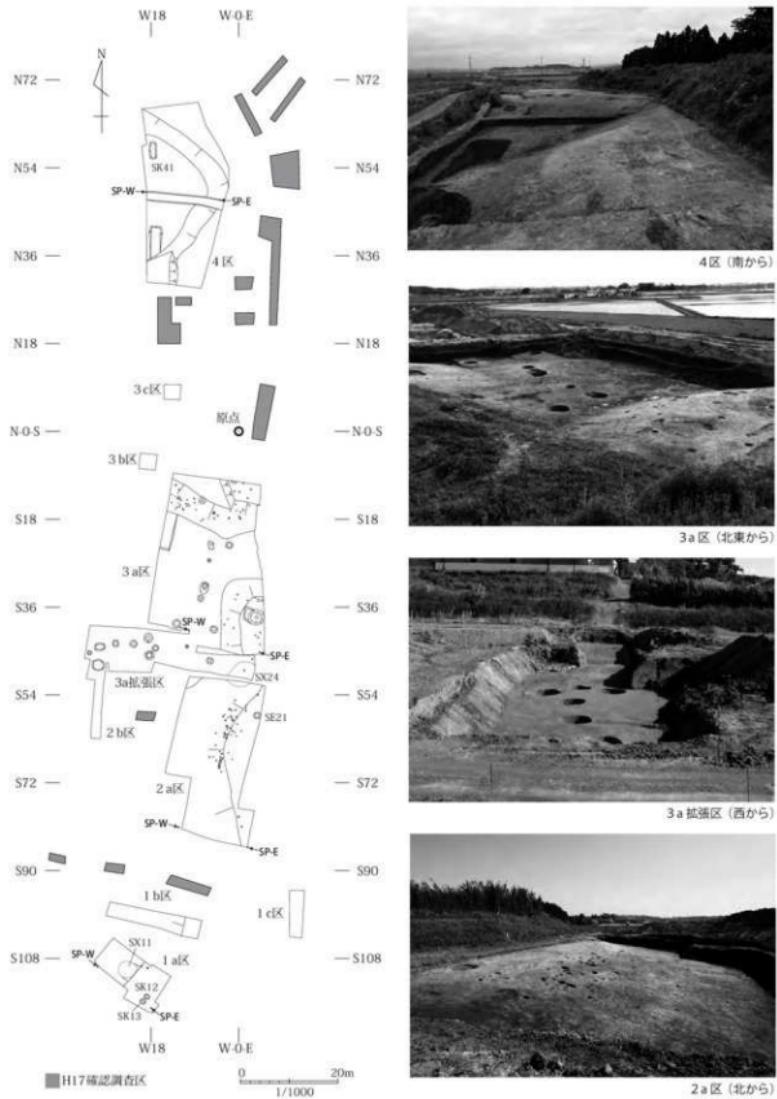
【構造】 素掘りの井戸跡である。

【規模・平面形・断面形】 上面は径約 1.4m、底面は径約 0.9m の円形を呈する。深さ約 0.9m で、断面形は円筒形を呈する。

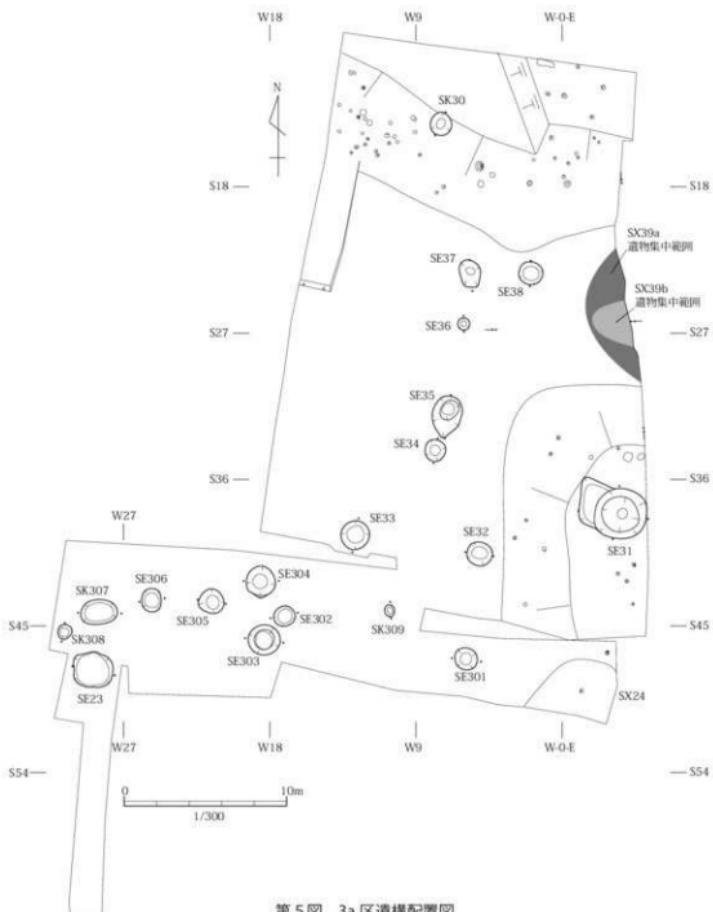
【堆積土】 灰白色等の地山粘土ブロックを含む黄灰色砂や暗黃灰色砂、褐灰色シルトや黒褐色砂質シルトで埋め戻されている。



第3図 基本層序断面



第4図 遺構全体図



第5図 3a区遺構配置図

〔出土遺物〕 出土していない。

【SE23 井戸跡】(第5・6図)

〔位置〕 2b 区北側 〔確認面〕 基本層位第9層

〔構造〕 素掘りの井戸跡である。

〔規模・平面形・断面形〕 上面は長径約2.6m、短径約2.2mの楕円形、底面は径約2.1mの円形を呈する。

深さ約1.2mで、断面形は円筒形を呈する。

〔堆積土〕 暗褐色シルト、炭化物や伐採された自然木を含む黒褐色粘土質シルト、黒褐色砂質シルト等が自然堆積した後、にぶい黄褐色ブロックを含む暗褐色シルトで人為的に埋め戻されている。

〔出土遺物〕 堆積土から敲打具と考えられる木製品が出土している。(第7図1)

【SE31 井戸跡】(第5・6図)

〔位置〕 3a 区南東側 〔確認面〕 地山 (基本層位第13層)

〔構造〕 素掘りの井戸跡である。

〔規模・平面形・断面形〕 上面は径約3.1mの円形で、西側に幅約2.8m、奥行約1.2～1.9m、深さ20cm前後の浅い方形の張り出しが付く。底面は径約0.6mの円形を呈する。深さ約1.3mで、断面形は漏斗形を呈する。西側上半の張り出し部分は特に傾斜が緩やかになっており、ここを取水場にしたものと考えられる。

〔堆積土〕 灰黄褐色粘土質シルトや褐灰色シルト質粘土、黒色粘土の他、最下部には灰白色火山灰ブロックや炭化物を含む灰色粘土等が自然堆積している。

〔出土遺物〕 堆積土から木製の柄(第7図2)、石臼(写真図版13-6)のほか土師器壺、縄文土器深鉢、砥石、大型哺乳類の肋骨(写真図版13-12)が出土している。

【SE32 井戸跡】(第5・6図)

〔位置〕 3a 区南側 〔確認面〕 基本層位第9層

〔構造〕 素掘りの井戸跡である。

〔規模・平面形・断面形〕 上面は長径約1.5m、短径約1.4mの楕円形、底面は長径約1.0m、短径約0.7mの楕円形を呈する。深さ約0.9mで、断面形は円筒形を呈する。

〔堆積土〕 黒色や黒褐色の粘土質シルト等が自然堆積している。

〔出土遺物〕 堆積土から縄文土器小破片が出土している。

【SE33 井戸跡】(第5・6図)

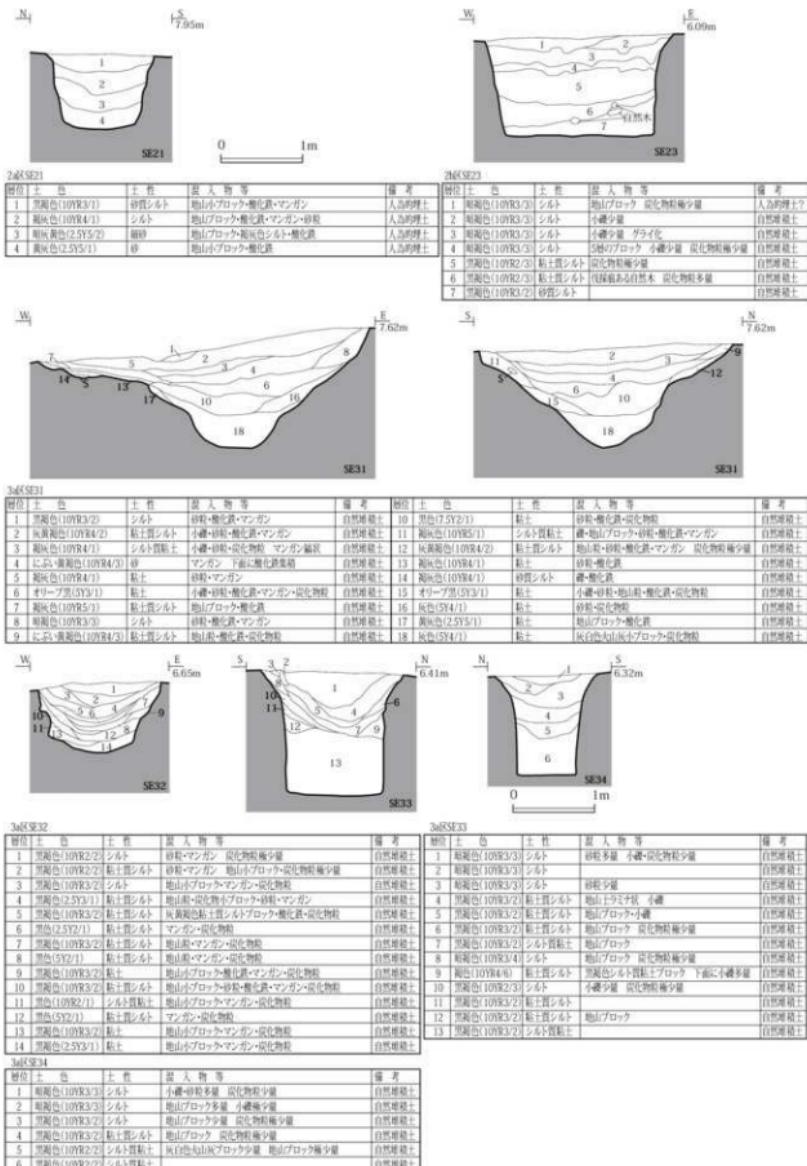
〔位置〕 3a 区南西側 〔確認面〕 基本層位第9層

〔構造〕 素掘りの井戸跡である。

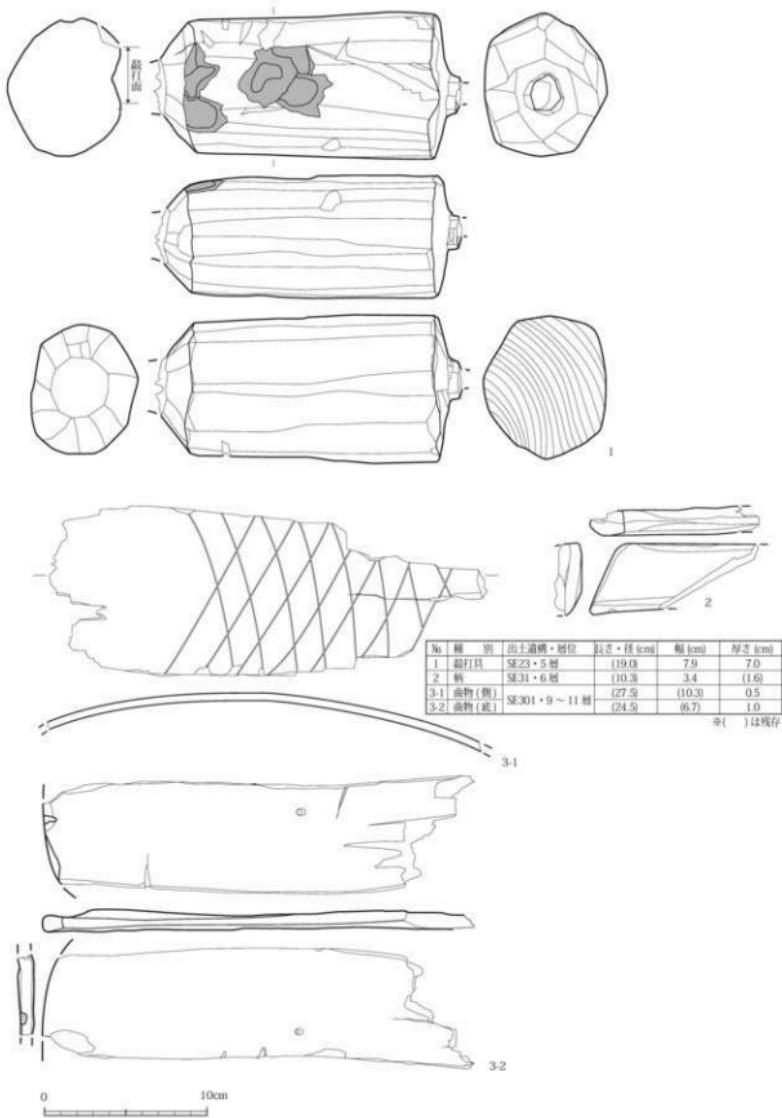
〔規模・平面形・断面形〕 上面は径約1.8m、底面は径約1.1mの円形を呈する。深さは約1.5mで第、断面形は漏斗形を呈する。

〔堆積土〕 褐色粘土を多く含む暗褐色シルトや黒褐色粘土質シルト、褐色粘土質シルト等が自然堆積している。

〔出土遺物〕 堆積土から磨石が1点出土している。



第6図 井戸跡断面図 (1)



第7図 SE23・31・301井戸跡出土木製品

【SE34 井戸跡】(第5・6図)

【位置】 3a区中央南寄り [確認面] 基本層位第9層

【構造】 素掘りの井戸跡である。

【規模・平面形・断面形】 上面は径約1.3m、底面は径約0.6mの円形を呈する。深さ約1.2mで基本層位第10層まで掘り込まれており、断面形は漏斗形を呈する。

【堆積土】 褐色地山ブロック等を含む暗褐色シルト、地山ブロックや少量の炭化物を含む黒褐色シルトや黒褐色粘土質シルトの他、下部には灰白色火山灰ブロックを少量含む黒褐色シルト質粘土等が自然堆積している。

【出土遺物】 堆積土から磨石が1点出土している。

【SE35 井戸跡】(第5・8図)

【位置】 3a区中央南寄り [確認面] 基本層位第9層

【構造】 素掘りの井戸跡である。

【規模・平面形・断面形】 上面は長径約2.6m、短径約1.8mの楕円形、底面は径約0.7mの円形を呈する。深さ約1.5mで基本層位第10層まで掘り込まれており、断面形は漏斗形を呈する。南側上半は特に傾斜が緩やかになっており、ここを取水場にしたものと考えられる。

【堆積土】 地山粒や褐色地山ブロック等を含む暗褐色シルトや黒褐色シルト、褐色～褐灰色粘土質シルトの他、最下部には灰白色火山灰ブロックを極少量含む黒褐色シルト質粘土が自然堆積している。

【出土遺物】 堆積土から石臼（写真図版13-7）や縄文土器深鉢の小破片、植物種子（写真図版13-13）が少量出土している。

【SE36 井戸跡】(第5・8図)

【位置】 3a区中央 [確認面] 基本層位第9層

【構造】 素掘りの井戸跡である。

【規模・平面形・断面形】 上面は径約0.8m、底面は径約0.3mの円形を呈する。深さ約0.6mで、断面形は漏斗形を呈する。

【堆積土】 地山粒や地山ブロックを含む黒色～オリーブ黒色粘土や炭化物を含む黒色粘土、地山粒を含むオリーブ黒色シルト質粘土の他、最下部には灰白色火山灰ブロックを多量に含む灰色粘土が自然堆積している。

【出土遺物】 出土していない。

【SE37 井戸跡】(第5・8図)

【位置】 3a区中央 [確認面] 基本層位第9層

【構造】 素掘りの井戸跡である。

【規模・平面形・断面形】 上面は長径約1.6m、短径約1.3mの楕円形、底面は径約0.6mの円形を呈する。深さ約0.9mで基本層位第10層まで掘り込まれており、断面形は漏斗形を呈する。南側上半は特に傾斜が緩やかになっており、ここを取水場にしたものと考えられる。

【堆積土】 炭化物を含む黒色シルト質粘土や地山粒を含むオリーブ黒色シルト、地山ブロックを含む

黒色シルト質粘土等が自然堆積している。

〔出土遺物〕 出土していない。

【SE38 井戸跡】(第5・8図)

〔位置〕 3a 区中央東寄り 〔確認面〕 基本層位第9層

〔構造〕 素掘りの井戸跡である。

〔規模・平面形・断面形〕 上面は径約1.5m、底面は径約1.0mの円形を呈する。深さ約0.4mで、断面形は逆台形を呈する。

〔堆積土〕 炭化物を含む黒色砂質シルトやオリーブ黑色シルト質粘土、地山粒や炭化物を含む黒色粘土が自然堆積している。

〔出土遺物〕 出土していない。

【SE301 井戸跡】(第5・9図)

〔位置〕 3a 拡張区東側 〔確認面〕 基本層位第9層

〔構造〕 素掘りの井戸跡である。

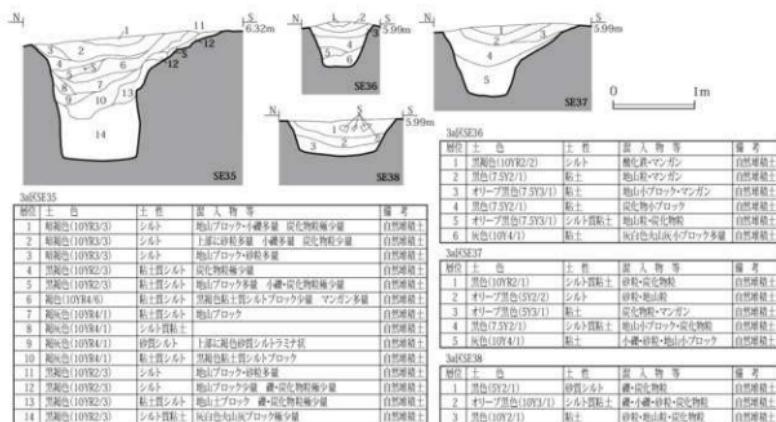
〔規模・平面形・断面形〕 上面は径約1.4m、底面は径約0.7mの円形を呈する。深さ約1.4mで地山(基本層位第13層)まで掘り込まれており、断面形は漏斗形を呈する。

〔堆積土〕 緑黒シルト質粘土や暗緑灰色シルト質粘土等が自然堆積した後、地山粒や地山ブロックを含む黒褐色シルト、地山ブロックを含む暗緑灰色粘質シルト、地山粒を多量に含む緑黒シルト質粘土で人為的に埋め戻されている。

〔出土遺物〕 堆積土下部(9~11層)から曲物が出土している(第7図)。また、堆積土から縄文土器深鉢が極少量、剥片や石核が1点ずつ出土している。

【SE302 井戸跡】(第5・9図)

〔位置〕 3a 拡張区西側 〔確認面〕 基本層位第9層



第8図 井戸跡断面図(2)

【構造】素掘りの井戸跡である。

【規模・平面形・断面形】上面は径約1.3m、底面は径約0.9mの円形を呈する。深さ約1.2mで、断面形は円筒形を呈する。

【堆積土】地山ブロックを少量含む褐灰色シルト質粘土が自然堆積した後、地山ブロックを多く含む灰褐色シルト、地山ブロックを含む褐灰色粘質シルト、暗緑灰色粘質シルト等で人為的に埋め戻されている。

【出土遺物】出土していない。

【SE303 井戸跡】(第5・9図)

【位置】3a 抗張区西側【確認面】基本層位第9層

【構造】素掘りの井戸跡である。

【規模・平面形・断面形】上面は径約1.9m、底面は径約0.7mの円形を呈する。深さは約1.6mで、断面形は漏斗形を呈する。

【堆積土】暗緑灰色シルト質粘土が自然堆積した後、地山ブロックや炭化物等を含む褐灰色シルト、暗褐色シルト、暗緑灰色シルト質粘土等で人為的に埋め戻されている。

【出土遺物】出土していない。

【SE304 井戸跡】(第5・9図)

【位置】3a 抗張区西側【確認面】基本層位第9層

【構造】素掘りの井戸跡である。

【規模・平面形・断面形】上面は長径約2.0m、短径約1.7mの楕円形、底面は径約0.7mの円形を呈する。深さ約1.2mで、断面形は漏斗形を呈する。

【堆積土】底面に地山ブロックを含む暗緑灰色シルト質粘土がわずかに自然堆積した後、地山ブロックを含む灰黄褐色シルトや暗褐色シルト、褐灰色粘質シルトや暗緑灰色シルト質粘土等で人為的に埋め戻されている。

【出土遺物】出土していない。

【SE305 井戸跡】(第5・9図)

【位置】3a 抗張区西側【確認面】基本層位第9層

【構造】素掘りの井戸跡である。

【規模・平面形・断面形】上面は長径約1.6m、短径約1.4mの楕円形、底面は径約0.8mの円形を呈する。深さ約1.6mで、断面形は漏斗形を呈する。

【堆積土】作業中の崩落のため詳細は不明であるが、下部は自然堆積、中～上部は人為的埋土である。

【出土遺物】出土していない。

【SE306 井戸跡】(第5・9図)

【位置】3a 抗張区西側【確認面】基本層位第9層

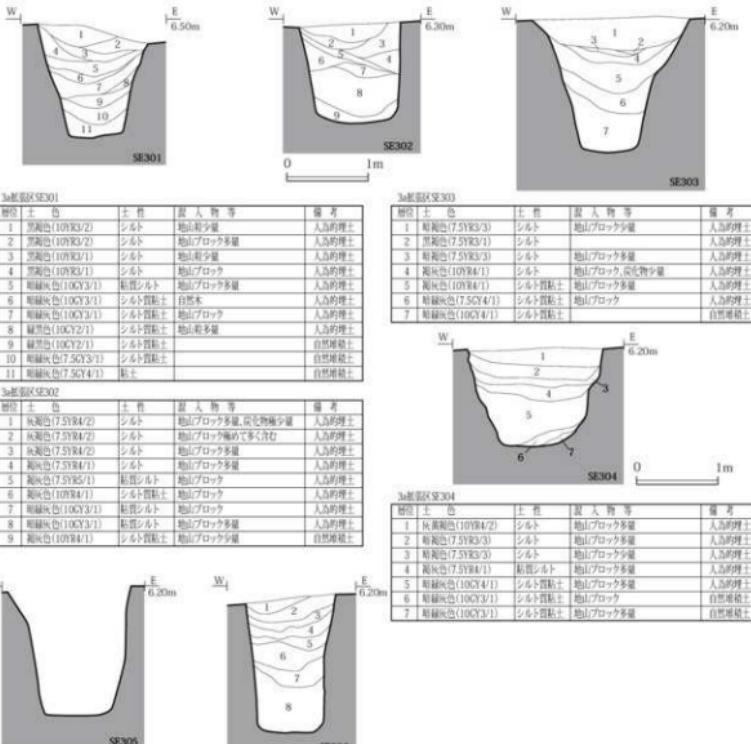
【構造】素掘りの井戸跡である。

【規模・平面形・断面形】上面は長径約1.4m、短径約1.2mの楕円形、底面は径約0.8mの円形を呈する。

深さ約1.7mで、断面形は円筒形を呈する。

[堆積土] 地山ブロックを少量含む暗緑灰色シルト質粘土が自然堆積した後、地山ブロックを含む灰黄褐色シルトや褐灰色粘質シルト、暗緑灰色シルト質粘土等で人為的に埋め戻されている。

[出土遺物] 出土していない。



第9図 井戸跡断面図（3）

(2) 土壌

7基検出し、重複は認められない。時期はSK41については基本層位第8層上面で確認し、第4a層に覆われることから概ね古代のもの、SK307～309については井戸跡と一連で検出され、堆積土等も同様であることから、これらとほぼ同時期のものと考えられる。その他については不明である。

【SK12 土壌】(第4・10図)

【位置】 1a区南東側【確認面】 地山（基本層位第13層）

【規模・平面形・断面形】 規模は長辺約1.1m、短辺約0.8m、深さ約0.2m。平面形は隅丸方形、断面形は底面がほぼ平坦で、壁が急に立ち上がり逆台形を呈する。

【堆積土】 3層に分けられ、地山ブロックを含む灰黄褐色砂質シルトや黒褐色シルトが自然堆積している。

【出土遺物】 出土していない。

【SK13 土壌】(第4図)

【位置】 1a区南東側【確認面】 地山（基本層位第13層）

【規模・平面形・断面形】 規模は長辺約1.2m、短辺約1.1m、深さ約0.4m。平面形は隅丸方形、断面形は底面がほぼ平坦で、壁が急に立ち上がり逆台形を呈する。

【堆積土】 2層に分けられ、地山ブロックや炭化物を含む褐色砂質シルト、炭化物を多く含む褐灰色シルトが自然堆積している。

【出土遺物】 出土していない。

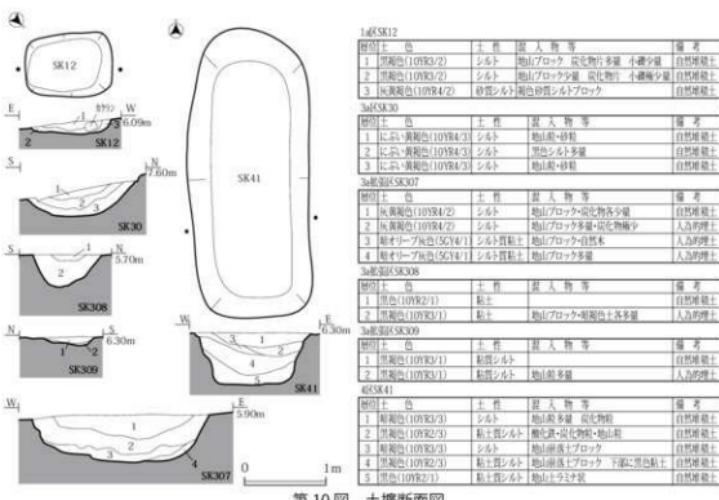
【SK30 土壌】(第5・10図)

【位置】 3a区北側【確認面】 地山（基本層位第13層）

【規模・平面形・断面形】 規模は長辺約1.4m、短辺約1.3m、深さ約0.3m。平面形は楕円形、断面形は底面が半円形を呈し、壁はゆるやかに立ち上がっている。

【堆積土】 3層に分けられ、地山粒を含むにぶい黄褐色シルト等が自然堆積している。

【出土遺物】 出土していない。



第10図 土壌断面図

【SK307 土壙】(第5・9図)

【位置】3a拡張区西側【確認面】基本層位第9層

【規模・平面形・断面形】上面は長径約2.2m、短径約1.5mの楕円形、底面は長径約1.6m、短径1.1mの楕円形を呈する。深さ約0.6mで、断面形は逆台形を呈する。

【堆積土】4層に分けられ、地山ブロックを含む灰黄褐色シルトや暗オリーブ灰色シルト質粘土により人為的に埋め戻された後、地山ブロックや炭化物を少量含む灰黄褐色シルトが自然堆積している。

【出土遺物】出土していない。

【SK308 土壙】(第5・10図)

【位置】3a拡張区西側【確認面】基本層位第9層

【規模・平面形・断面形】上面は長径約0.9m、短径0.7mの楕円形、底面は径約0.3mの円形を呈する。深さ約0.4mで断面形は「U」字状を呈する。

【堆積土】2層に分けられ、地山ブロックや暗褐色シルトブロックを含む黒褐色粘土により人為的に埋め戻された後、黒色粘土が自然堆積している。

【出土遺物】出土していない。

【SK309 土壙】(第5・10図)

【位置】3a拡張区中央【確認面】基本層位第9層

【規模・平面形・断面形】上面は長径約0.7m、短径約0.6mの楕円形、底面は長径約0.4m、短径約0.3mの楕円形を呈する。深さ約0.1mで断面形は逆台形を呈する。

【堆積土】2層に分けられ、黒褐色粘質シルトが自然堆積している。

【出土遺物】出土していない。

【SK41 土壙】(第4・10図)

【位置】4区北西側【確認面】基本層位第8層

【規模・平面形・断面形】規模は長辺約3.5m、短辺約1.5m、深さ約0.6mで、基本層位第9層まで掘り込まれている。平面形は隅丸方形、断面形は底面がほぼ平坦で、壁が急に立ち上がり逆台形を呈する。

【堆積土】5層に分けられ、黄橙色粘土をラミナ状に含む黒色粘土質シルトや地山粒等を含む黒褐色粘土質シルト、暗褐色シルトが自然堆積している。

【出土遺物】堆積土から磨石が1点出土している(写真図版10-40)。

(3) 遺物包含層

基本層位第4a～e層が古代、第10a～c層が縄文時代の遺物包含層であるが、地点により遺物量に疎密が認められる。分布状況をみると土師器・須恵器が2・3a区、縄文土器・石器は各調査区において出土しているが、特に3a区東側の沢地状地形周辺では各時期の遺物が密に集積する状況を確認し、これをSX39a(縄文)、SX39b(古代)として精査を行った。SX39aについては遺物の摩滅が著しく、二次堆積と考えられる。なお、1区中央(SX11)や2区北東端から3a拡張区東端(SX24)

においても縄文時代の遺物が比較的多く出土しているが、特徴としてはSX39とほぼ同様である（第12～15図）。

【SX39a 遺物包含層】（第11図）

【確認面】地山【重複】SX39b 遺物包含層に覆われている。

【分布範囲】南北約8.5m、東西約2.5mの範囲で遺物が集積しており、東側は更に調査区外に延びる。

3層に細分され、層の厚さは各々最大で25cm前後である。

【出土遺物】

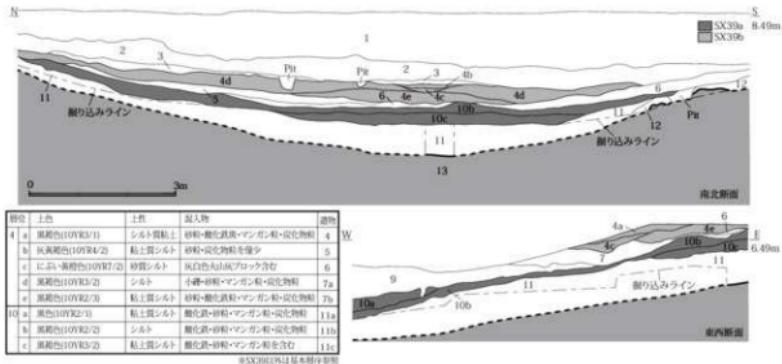
SX11・24を含め、各層から縄文土器を中心に、少量の石器等が整理用コンテナで約7箱出土している。第10b層からの出土が最も多く、第10a層出土遺物は極少量である。また、多くは小破片で摩滅が著しく、図示できたものは少ない（第12～15図）。

縄文土器はその殆どが深鉢である（第12図）。口縁部形態をみると、平坦口縁（6・12）、鋸歯状口縁（1～4）、指頭押圧による小波状口縁（7・10）、環状の突起を有する大波状口縁（13～15）等があり、山形状や環状の突起には竹管による刺突を施したもの（5・14）がある。

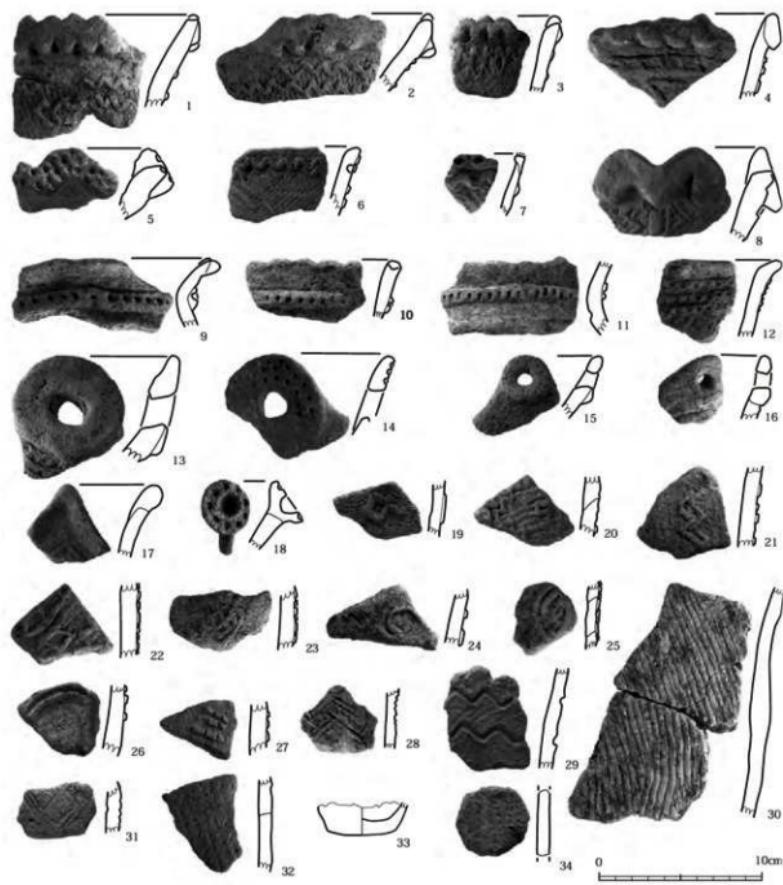
頸部から胴部にかけての装飾をみると、粘土紐貼付文と沈線文が主である。粘土紐は山形状（1～3・6～8・19～21）や梯子状（4・22）、渦巻状（24・25・26）、格子状（23）等に貼り付けられており、また、隆帯上に刻みを施したもの（27）や円形竹管等による刺突を施したもの（9～12）もみられる。沈線文は山形状に施されており（29）、半截竹管による平行沈線文（28・31）もみられる。また、10層下部からは胎土に纖維を含む土器片も極少量出土している（30）。

土製品は、円盤状土製品が1点出土している（第12図34）。

石器は、石鏃（第13図1・2）、石槍（3～5）、石鎧（6～8）、スクレイバー状の不定形石器（9）、楔形石器（10）、磨製石斧（第14図1・3）、笠状石製品（2）、有溝砥石（4～6、写真図版10-43）、凹石（第15図1・3）、磨石（2・4、写真図版10-39～42）、石皿（写真図版10-44）等が出土している。特徴として、石器を転用し、別の器種として再加工・使用されたと考えられるものが少なからずみられ、磨製石器を転用した石鎧（第13図6）や、石刀の破片を転用した笠状石製品、



第11図 SX39断面



第12図 遺物包含層出土土器

凹石を転用した磨石（第15図2）、スタンプ形石器に類似する磨石（第15図4）がある。

遺物の年代：上記の遺物の中で、縄文土器の諸特徴を東北地方南部地域の土器編年の中で検討すると、山内清男により型式設定された「大木式土器」（山内：1937）の範疇に収まる。その中でも主たる土器については、「口縁部が鋸歯状あるいは波状となる」「頭・胴部に山形状あるいは梯子状等に粘土紐を貼り付ける」「環状の突起が付く」等といった特徴を有しており、これらは前期後葉の土器形式である「大木5式」に比定することができる。該期の土器は県内では、七ヶ浜町大木開貝塚（八巻：1979）、栗原市嘉倉貝塚（宮教委：2003）、登米市龍塚貝塚（加藤：1956、興野：1981）等があげられ、今回出土した遺物の多くもこれらと、ほぼ同時期のものと考えられる。

遺物包含層十土器(縄文土器)観察表

No.	種別	出土区・層位	特徴
1	縄文土器	深鉢 3a 区 10c 層 (SX39a)	(口縁上) 下削口文 (胸部) 山形状粘土細粒付文、縄文 (LR)
2	縄文土器	深鉢 3a 区 10c 層 (SX39a)	(口縁) 上下削口文 (胸部) 山形状粘土細粒付文、縄文 (LR)
3	縄文土器	深鉢 3a 区 10b 層 (SX39a)	(口縁) 上下削口文 (胸部) 山形状粘土細粒付文、縄文 (LR)
4	縄文土器	深鉢 3a 区 10c 層	(口縁) 指面削口による上下削口文 (胸部) 條子状粘土細粒付文、縄文 (LR)
5	縄文土器	深鉢 3a 区 10c 層	(口縁) 剣突文のある山形状突起
6	縄文土器	深鉢 3a 区 10b 層 (SX39a)	(口縁) 平底 (胸部) 山形状粘土細粒付文、縄文 (LR)
7	縄文土器	深鉢 3a 区 10b 層 (SX39a)	(口縁) 斜削口による小波模様 (胸部) 山形状粘土細粒付文、縄文 (LR)
8	縄文土器	深鉢 2a 区 10c 層	(口縁) 山形状付文 (胸部) 弧形、粘土細粒付文、縄文 (LR)
9	縄文土器	深鉢 3a 区 4e 層 (SX39a)	(口縁) 斜削口 (胸部) 楕円形帶 (上) 剣突文、縄文 (LR)
10	縄文土器	深鉢 3a 区 10b 層 (SX39a)	(口縁) 斜削口による小波模様 (胸部) 橢圓形帶 (上) 剣突文
11	縄文土器	深鉢 2a 区 10c 層	(胸部) 縦位偏移 (上) 剑突文
12	縄文土器	深鉢 3a 区 10c 層 (上)	(口縁) 平底 (胸部) 縦位偏移 (上) 剑突文、縄文 (LR)
13	縄文土器	深鉢 3a 区 10c 層 (SX39a)	(口縁) 番状突起、粘土細粒付文、縄文 (LR)
14	縄文土器	深鉢 3a 区 10b 層 (SX39a)	(口縁) 番状突起 (上) 剑突文
15	縄文土器	深鉢 3a 区 10b 層 (SX39a)	(口縁) 番状突起
16	縄文土器	深鉢 3a 区 10c 層 (SX39a)	(胸部) 大波模様、貫通孔、楕圓形帶
17	縄文土器	深鉢 3a 区 10c 層 (上)	(口縁) 大波模様、粘土細粒付文
18	縄文土器	深鉢 3a 区 10c 層 (SX39a)	(口縁) 円錐状突起 (上) 背骨、劍突文
19	縄文土器	深鉢 3a 区 10b 層 (SX39a)	(胸部) 山形状粘土細粒付文、縄文 (LR)
20	縄文土器	深鉢 3a 区 10c 層 (SX39a)	(胸部) 山形状粘土細粒付文、縄文 (LR)
21	縄文土器	深鉢 3a 区 10b 層 (SX39a)	(胸部) 山形状粘土細粒付文、縄文 (LR)
22	縄文土器	深鉢 2a 区 10c 層	(胸部) 條子状、山形状粘土細粒付文、縄文 (LR)
23	縄文土器	深鉢 2a 区 10c 層	(胸部) 條子状粘土細粒付文、縄文 (LR)
24	縄文土器	深鉢 3a 区 10b 層 (SX39a)	(胸部) 滑呑状粘土細粒付文
25	縄文土器	深鉢 3a 区 10c 層 (SX39a)	(胸部) 滑呑状粘土細粒付文、縄文 (LR)
26	縄文土器	深鉢 3a 区 10b 層 (SX39a)	(胸部) 滑呑状粘土細粒付文、縄文 (LR)
27	縄文土器	深鉢 3a 区 10c 層 (SX39a)	(胸部) 斧削 (上) 剑突文、縄文 (LR)
28	縄文土器	深鉢 3a 区 10b 層 (SX39a)	(胸部) 半截竹节による山形状平行沈線文、縄文 (LR)
29	縄文土器	深鉢 3a 区 10b 層 (SX39a)	(胸部) 山形状沈線文、縄文 (LR)
30	縄文土器	深鉢 1a 区 10b 層 (上)	(胸部) 条痕文、軒子状繊維を含む
31	縄文土器	深鉢 3a 区 10b 層 (SX39a)	(胸部) 半截竹节による山形状平行沈線文
32	縄文土器	深鉢 4 区 10c 層	(胸部) 縄文 (LR)
33	袖珍土器	3a 区 7 層	瓦部
34	円盤状土器製品	3a 区 10c 層 (SX39a)	縄文瓦跡

[SX39b 遺物包含層] (第 11 図)

[確認面] 地山 [重複] SX39a 遺物包含層を覆っている。

[分布範囲]

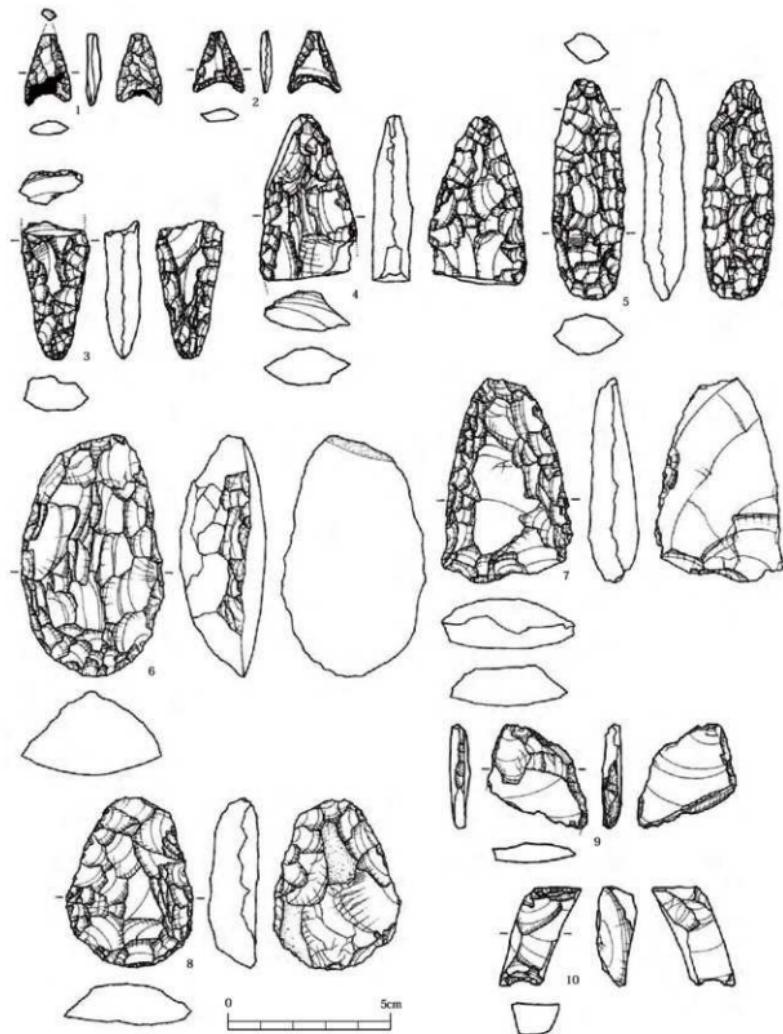
南北約 3.0m、東西約 2.2m の範囲で遺物が集積しており、東側は更に調査外に延びる。4a ~ e の 5 層に細分され、4c 層には灰白色火山灰がブロック状に含まれている。層の厚さは各々最大で 4a 層約 16cm、4b 層約 8cm、4c 層約 24cm、4d 層約 30cm、4e 層約 25cm である。

[出土遺物]

各層から土師器環・高台环・鉢・甕・須恵器環・蓋・壺・甕が整理用コンテナで約 2 箱出土した他、SX39a と同様の特徴を有し、下層から混入したと考えられる縄文土器や石器も整理用コンテナで約 2 箱程出土している。

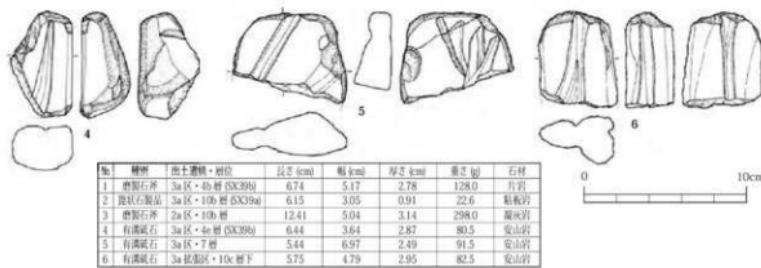
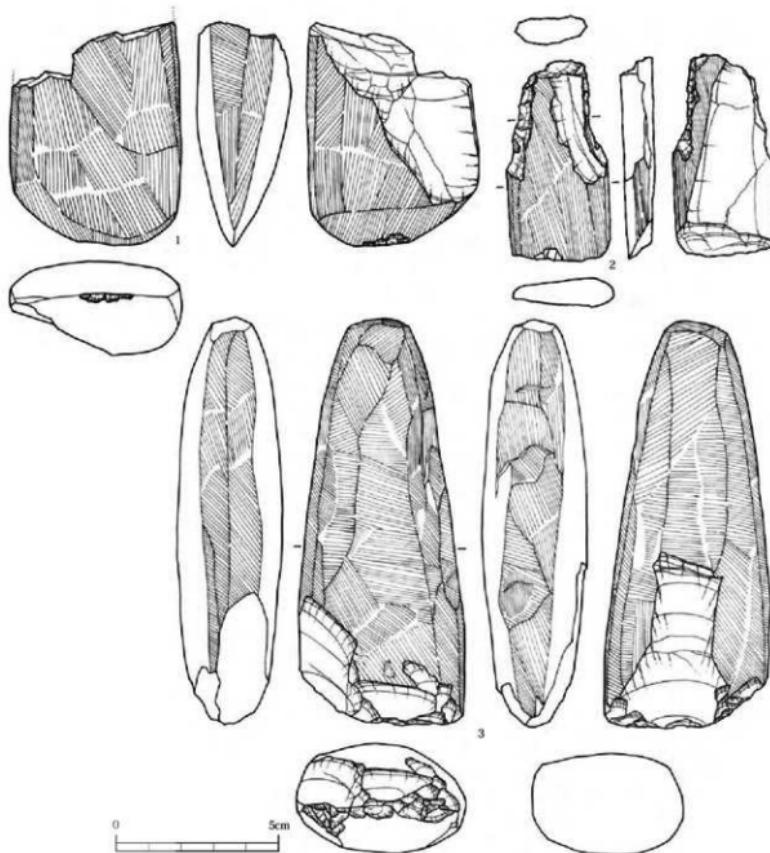
土師器は 4a 層と 4e 層から环や甕などが多量に出土しているが、須恵器は全体として少量で、大部分が环である。図示できたのは土師器環・甕・鉢・須恵器環・鉢の 18 点であり（第 16 図）、土師器高台环や須恵器蓋・壺・甕などは小破片の為、図示できなかった。

土師器環は、製作にロクロを使用しないもの（非ロクロ調整）と使用するもの（ロクロ調整）のものとがある。前者はいずれも底部平底で体部から口縁部にかけて内湾して立ち上がりており、外面に沈線状の軽い段を有するもの（1・2）と、無段のもの（3・4）がある。器面調整は、外面が手持ちヘラケズリ後、ヘラミガキがなされており、内面はヘラミガキ後、黒色処理されている。後者は、底部平底で体部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がり、底部回転式切り無調整のもの（12～14）である。器面調整は、外面はロクロナデ、内面はヘラミガキ後、黒色処理されている。鉢（18）



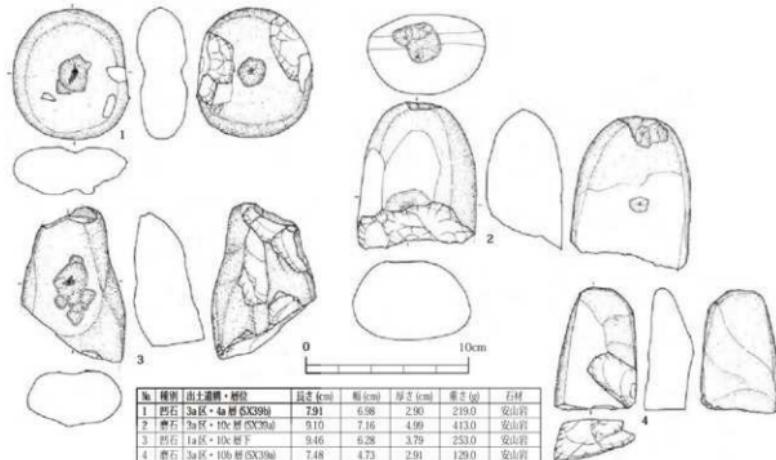
No.	種別	出土遺構・部位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	No.	種別	出土遺構・部位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材
1	石器	3a区・縫合面	212	136	0.42	1.1	麻城石岩	6	石器	1a区・10b層(SX39b)	7.36	427	2.58	89.0	黑色石
2	石器	3a区・10b層(SX39b)	191	155	0.34	0.8	珪質頁岩	7	石器	1a区・10b層	6.22	395	1.48	33.6	黃灰石
3	石核	3a区・縫合面	421	199	0.98	8.6	珪質頁岩	8	石器	1a区・10b層	4.43	331	1.41	26.0	珪質頁岩
4	石核	3a区・4c層(SX39b)	503	300	1.18	18.6	珪質頁岩	9	不定形石器	3a区・縫合面	3.13	301	0.60	5.4	黑色石
5	石核	1a区・10b層	672	209	1.19	20.4	珪質頁岩	10	楔形石器	3a区・7層	3.04	230	1.02	6.5	珪質頁岩

第13図 遺物包含層出土石器(1)



第14図 遺物包含層出土石器(2)

No.	種類	出土遺物・層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材
1	磨製石斧	3a区・4b層(SK396)	6.74	5.17	2.78	128.0	片岩
2	磨製石斧	3a区・10b層(SK398)	6.15	3.05	0.91	22.6	片岩
3	磨製石斧	2a区・10b層	12.41	5.04	3.14	298.0	麻灰岩
4	有溝石刀	3a区・4e層(SK399)	6.44	3.64	2.87	80.5	安山岩
5	有溝石刀	3a区・7層	5.44	6.97	2.49	91.5	安山岩
6	有溝石刀	3a区・10c層下	5.75	4.79	2.95	82.5	安山岩



第15図 遺物包含層出土石器(3)

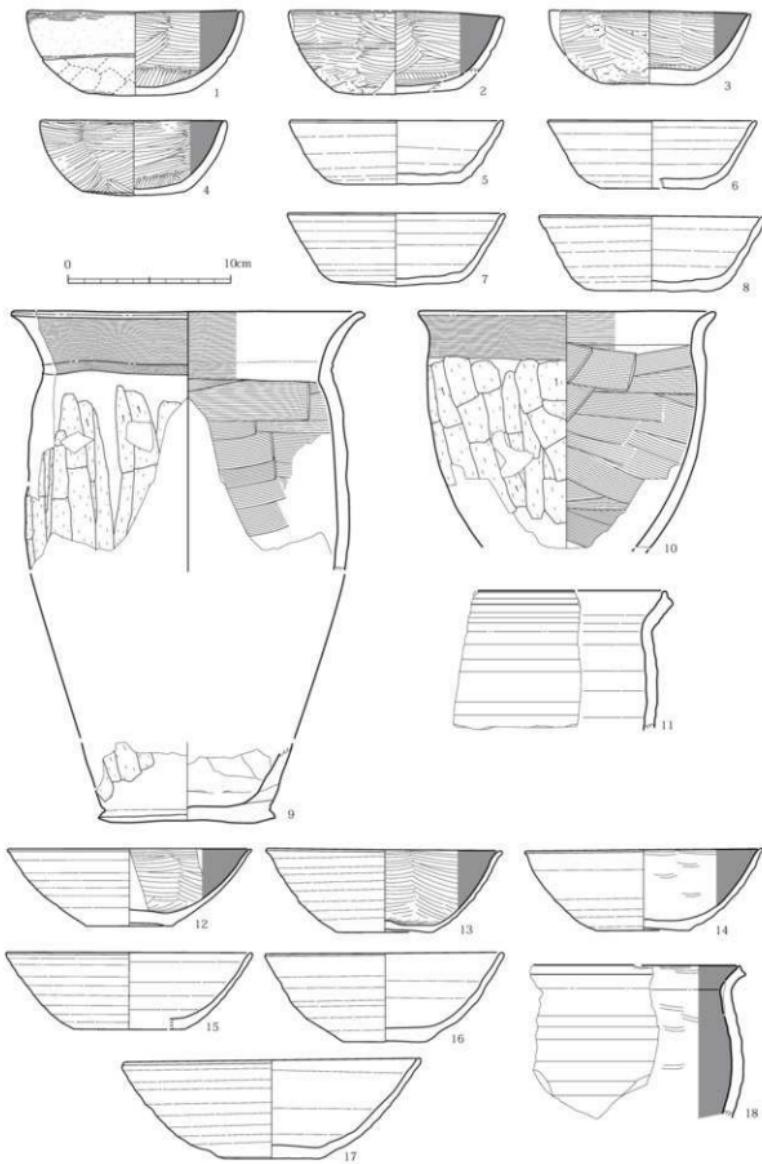
はロクロ調整で、口頭部は短く外反し、口縁端部は突帯状となる。器面調整は外面ロクロナデ、内面はヘラミガキ後、黒色処理されている。甕は非ロクロ調整（9・10）とロクロ調整のものがある。前者には長胴形と球胴形のものとがあるが、後者は小破片のため詳細は不明である。

須恵器环は体部から口縁部にかけて直線的に外傾し、底部がヘラ切り無調整のもの（5～8）と、体部が内湾、口縁部で直線的に外傾し、底部が回転糸切り無調整のもの（15～17）とがある。鉢（11）は、口頭部が「く」字状に外反し、口縁端部は突帯状になる。

他には鉄製の刀子が1点出土している（写真図版13-5）。

遺物の年代：今回出土した土器の特徴については前述した通りであるが、环類の製作技法を中心みてみると、これらはA：土師器は非ロクロ調整で平底、外面に沈線状の軽い段を有するものと、無段のものが共存する。須恵器环は、底部の切り離し技法がヘラ切りによるもの。B：土師器はロクロ調整で、底部の切り離し技法が土師器・須恵器ともに回転糸切り無調整によるものといった2つのグループに大別され、Aは4e層を中心出土し、Bは4a層を中心に4a～4d層で出土している。

次に、各グループの年代的な位置付けを検討すると、前者は東北地方南部の土器編年（氏家：1957）の国分寺下層式期の土器群に類例が求められ、県北の近在の遺跡では国分寺下層式期の中でもやや新しく位置づけられる、栗原市経ヶ崎遺跡出土土器（高教委：1998）や同市糠塚遺跡第1群土器（宮教委：1978）、同市有賀峰遺跡第1号住居跡出土土器（宮教委：1980）等と同様の特徴を有している。また、後者については表杉の入式（氏家：前掲）に比定され、10世紀前葉頃に降下したとされる灰白色火山灰を含む4c層の前後で出土していることから、年代は前者が8世紀後半頃、後者が10世紀前葉頃を中心とした時期のものと考えられる。



第16図 SX39b出土遺物

遺物包含層 (SC99a) 出土器類表

No.	種別	出土地点	特徴	内面	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	残高 (cm)
1	土師器	井戸跡	4e 層	外面：(口縁) ヨコナデミガキ (体・底部) 手持ケズリミガキ 内面：ミガキ・黒色處理	13.4	6.8	5.2	3/5
2	土師器	井戸跡	4e 層	外面：(口縁) ミガキ (体・底部) 手持ケズリミガキ 内面：ミガキ・黒色處理	13.2	7.4	5.2	3/5
3	土師器	井戸跡	4e 層	外面：手持ケズリミガキ 内面：ミガキ・黒色處理	12.3	5.9	4.5	1/2
4	土師器	井戸跡	確認面	外面：ミガキ 内面：ミガキ・黒色處理	11.6	6.4	4.1	2/5
5	須恵器	井戸跡	4e 層	内・外面：ロクロナデ 底部：ハマ切・軽いナデ	13.0	7.8	3.9	2/3
6	須恵器	井戸跡	4d 層	内・外面：ロクロナデ 底部：ハマ切・軽いナデ	(12.7)	(6.8)	4.1	2/3
7	須恵器	井戸跡	4e 層	内・外面：ロクロナデ 底部：ハマ切・軽いナデ	13.4	7.6	4.4	ほぼ完形
8	須恵器	井戸跡	4e 層	内・外面：ロクロナデ 底部：ハマ切	13.8	8.2	4.6	ほぼ完形
9	土師器	井戸跡	4e 層	外面：(口縁) ヨコナデ(胸部) 手持ケズリミガキ 内面：(口縁) ヨコナデ(胸部) ヘラナデ	21.8	(10.9)	(31.3)	1/6
10	土師器	井戸跡	4e 層	外面：(口縁) ヨコナデ(胸部) 手持ケズリミガキ 内面：(口縁) ヨコナデ(胸部) ヘラナデ	18.4			1/3
11	須恵器	井戸跡	4b 層	内・外面：ロクロナデ				破片
12	土師器	井戸跡	確認面	外面：ロクロナデ 内面：ミガキ・黒色處理 底部：(未)小切(縫)	(14.9)	5.4	4.8	1/5
13	土師器	井戸跡	4a 層	外面：ロクロナデ 内面：ミガキ・黒色處理 底部：(未)小切(縫)	14.6	6.2	5.2	ほぼ完形
14	土師器	井戸跡	確認面	外面：ロクロナデ 内面：ミガキ・黒色處理 底部：(未)小切	14.5	5.6	5.0	1/2
15	須恵器	井戸跡	4a 層	内・外面：ロクロナデ 底部：(未)小切	(15.2)	(6.8)	4.8	1/3
16	須恵器	井戸跡	4b 層	内・外面：ロクロナデ 底部：(未)小切	14.6	5.2	5.5	1/3
17	須恵器	井戸跡	4a 層	内・外面：ロクロナデ 底部：(未)小切	18.4	6.5	6.2	4/5
18	土師器	井戸跡	確認面	外面：ロクロナデ 内面：ミガキ・黒色處理				破片

第IV章 まとめ

- 井戸跡 16 基、土壙 7 基、遺物包含層 1 箇所、ピットなどを検出した。
- 遺物は、遺物包含層を中心に、井戸跡、土壙などの堆積土中等から、縄文土器、土師器、須恵器、石器などが整理用コンテナで 15 箱出土している。
- 井戸跡はすべて素掘りのもので、円弧状に列をなして検出されており、ほぼ一連の時期に掘り込まれたものと考えられる。時期は堆積土中に灰白色火山灰の小プロックが含まれる事などから、概ね古代末から中世頃のものと推定される。
- 土壙の時期は SK41 については確認面と堆積土の状況から概ね古代のもの、SK307・308・309 については井戸跡と一連で検出され、堆積土等も同様であることから、これらとほぼ同時期のものと考えられる。
- 遺物包含層は基本層位第 4a ~ e 層が奈良・平安時代（8 世紀後半及び 10 世紀前葉）、第 10a ~ c 層が縄文時代前期後葉（大木 5 式期）の遺物包含層である。

【参考文献】

- 井上克弘・山田一郎 1990 「東北地方を覆う古代珪長質テフラ“十和田一大湯浮石”の同定」『第四紀研究』第 29 卷 2 号
- 氏家和典 1957 「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第 14 輯
- 加藤 孝 1956 「宮城県登米郡新田村糠塚貝塚について」『登米郡新田村史』
- 興野義一 1958 「追川流域の石器時代文化」『仙台郷土研究』18-3
- 1981 「糠塚貝塚について」『仙台史』
- 白鳥良一 1980 「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要VII』宮城県多賀城跡調査研究所
- 高清水町教育委員会 1998 「経ヶ崎遺跡」「経ヶ崎跡跡」「観音沢遺跡」高清水町文化財調査報告書 第 1 集
- 中田町史編纂委員会 1977 「浅部遺跡の発掘」『中田町史』
- 林 謙作 1970 「宮城県浅部貝塚出土のシカ・イノシシ遺体」『物質文化』15
- 林 謙作 1971 「宮城県浅部貝塚出土の動物遺体」『物質文化』17
- 宮城県教育委員会 1978 「糠塚遺跡」『宮城県文化財発掘調査報告書(昭和 52 年度分)』宮城県文化財調査報告書 第 53 集
- 宮城県教育委員会 1980 「有賀峰遺跡」「東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ」宮城県文化財調査報告書 第 69 集
- 宮城県教育委員会 1990 「寺池遺跡」「大貫山(眞跡ほか)」宮城県文化財調査報告書 第 137 集
- 宮城県教育委員会 2003 「嘉倉貝塚」宮城県文化財調査報告書 第 192 集
- 八巻正文 1979 「大木町貝塚—昭和 52 年度環境整備調査報告書」七ヶ浜町文化財調査報告書 第 4 集
- 山内 清男 1937 「縄文土器型式の細別と大別」『先史考古学』1-1



遺跡遠景（南西から）



1 : Ia 区（西から）
2 : SK12（北から）
3 : SK12 断面（北から）
4 : SK13（南から）
5 : SK13 断面（北から）
6 : SK12・13（東から）
7 : Ia 区南壁（北から）



2



3



4



5



6



7

図版 2



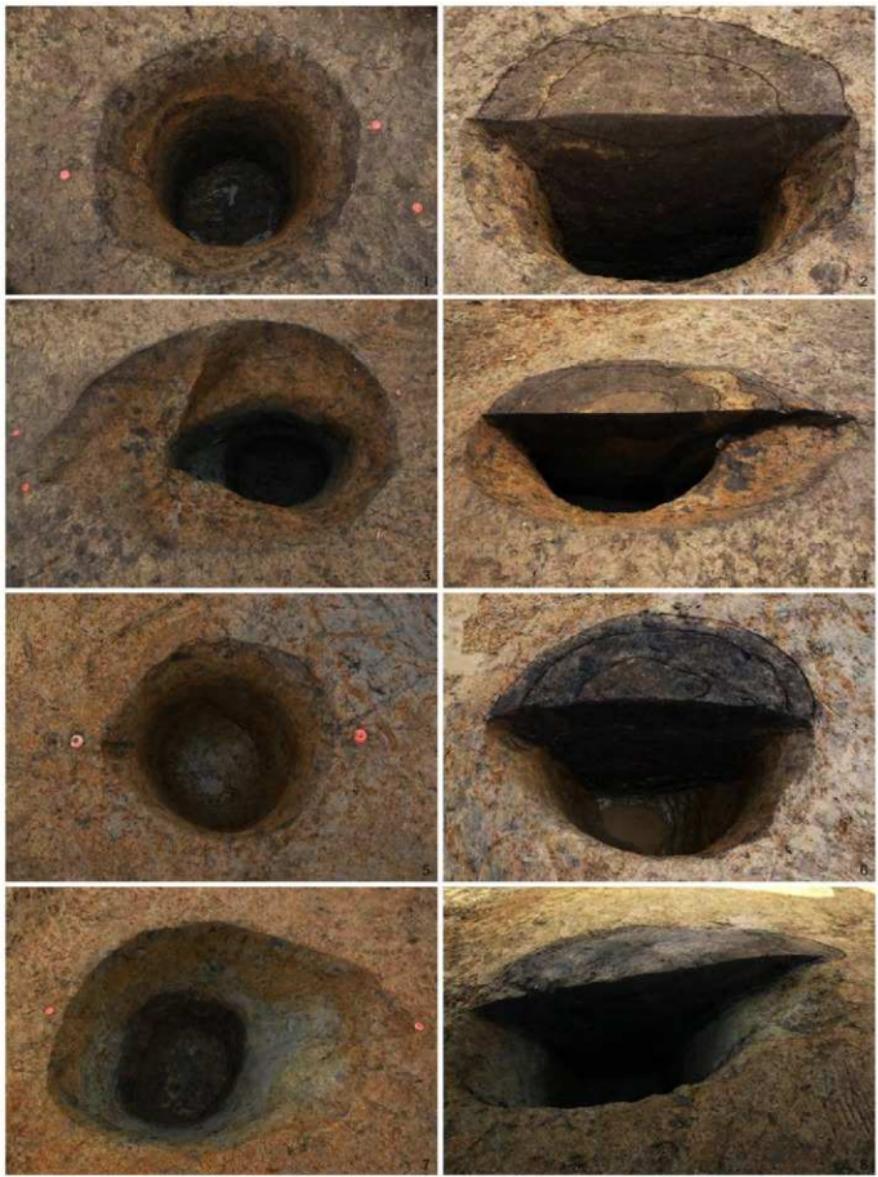
図版 3



1 : 3a 区（北東から）
2 : SE31（東から）
3 : SE31 断面（南から）
4 : SE32（東から）
5 : SE32 断面（南から）
6 : SE33（南から）
7 : SE33 断面（東から）



図版 4



1 : SE34 (東から) 2 : SE34 断面 (西から) 3 : SE35 (東から) 4 : SE35 断面 (西から)
5 : SE36 (西から) 6 : SE36 断面 (西から) 7 : SE37 (西から) 8 : SE37 断面 (西から)



1 : 3a 拡張区（西から）
2 : SE301 (南から)
3 : SE301 断面 (南から)
4 : SE302 (南から)
5 : SE302 断面 (南から)
6 : SE303 (東から)
7 : SE303 断面 (南から)



2



3



4



5



6



7

図版 6



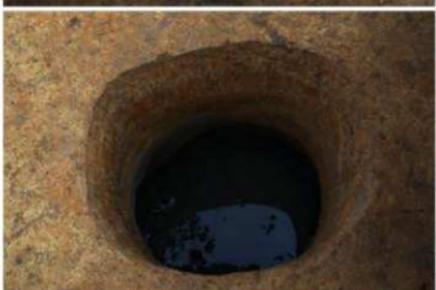
1:3a 拾張区南側（南西から）
2 : SE304 (南から)
3 : SE304 断面 (南から)
4 : SE306 (西から)
5 : SE306 断面 (南から)
6 : SE305 (北から)



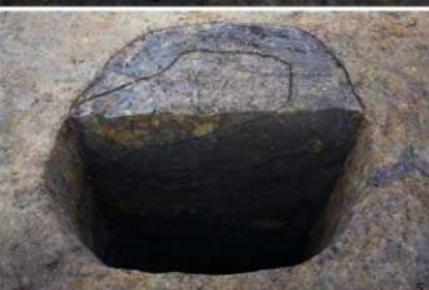
2



3



4

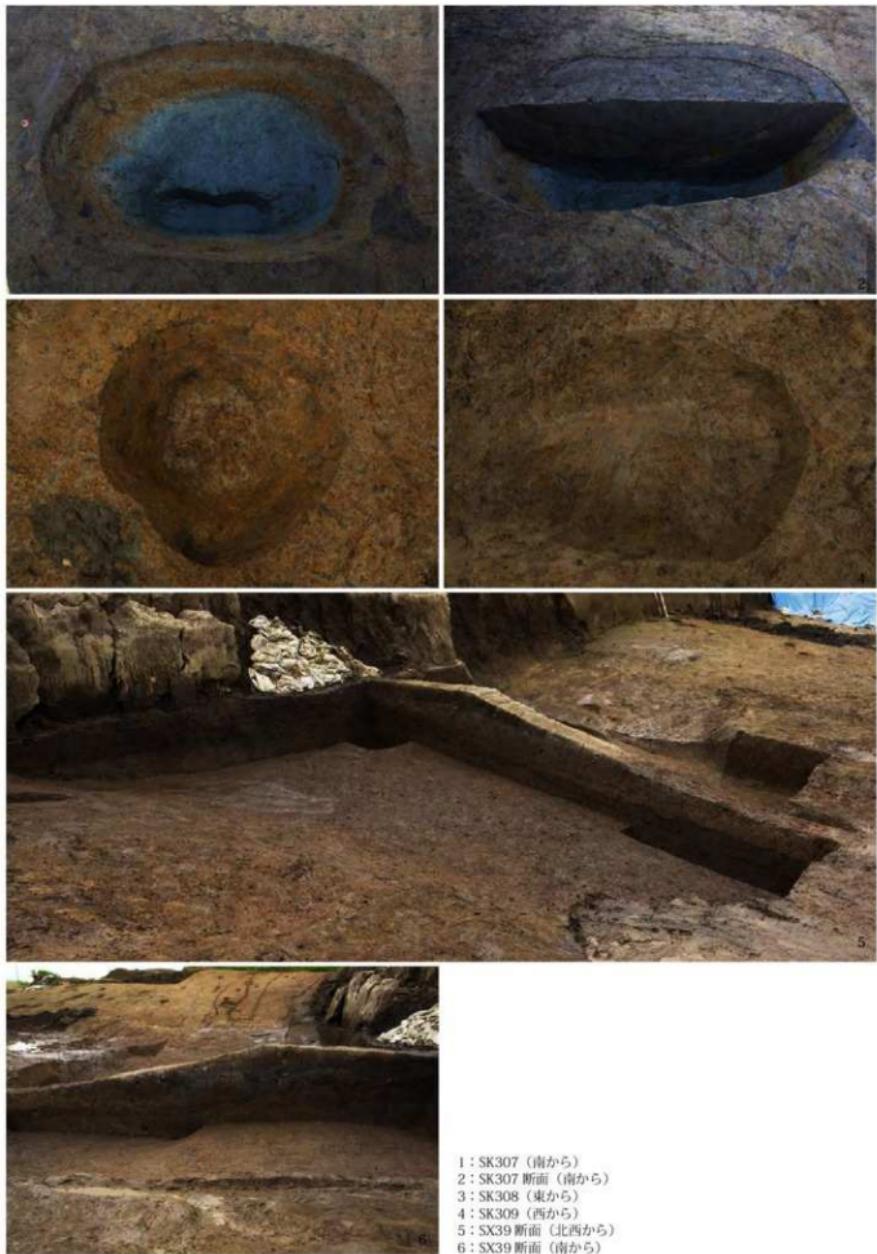


5



6

図版 7



図版 8



1: 4区（南から）
2: 4区中央ベルト断面（北から）
3: 4区サブトレンチ（南西から）
4: SK41（南から）
5: SK41 断面（北から）



2



4



5



44

- 1 ~ 34 : 第 12 図 1-34
 35 ~ 38 : 第 15 図 1-4
 39 ~ 42 : 磨石
 39 : SX39a-10c
 40 : SK41
 41 : SX11-10b 下
 42 : SX11-10b
 43 : 有溝砥石 (SX39a-10c)
 44 : 石皿 (SX39a-10c 下)
 (Se-1/3)

図版 10



図版 11



1～8：第16図1～8
9～14：第16図12～17 (S=1/3)



図版 13

菅ノ沢遺跡

目 次

第Ⅰ章 調査に至る経過	41
第Ⅱ章 遺跡の概要と周辺の遺跡	41
第Ⅲ章 発掘調査	42
1. 調査の方法と経過	42
2. 発見された遺構と遺物	43
参考文献	43
写真図版	45

調 査 要 項

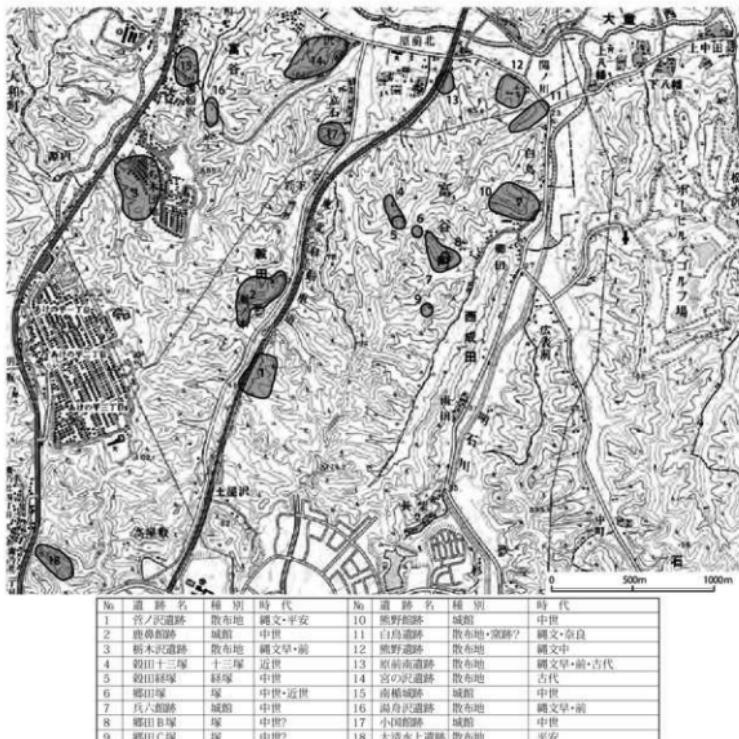
1. 遺跡名 菅ノ沢遺跡（宮城県遺跡登録番号：25021 遺跡記号：A I）
2. 所在地 宮城県黒川郡富谷町穀田字菅ノ沢・花ノ沢 地内
3. 調査主体 宮城県教育委員会
4. 調査担当 宮城県教育庁文化財保護課 佐藤憲幸 豊村幸宏 小野章太郎
5. 調査期間 平成18年7月3日～7日、7月18日～27日、11月17日
6. 調査面積 約650m²

第Ⅰ章 調査に至る経過

本書は、仙台北部道路建設工事に伴って平成18年度に実施した富谷町菅ノ沢遺跡の発掘調査報告書である。この道路は東北縦貫自動車道の仮称「富谷ジャンクション」にアクセスするものとして建設決定されたが、そのルート及び隣接する墓地への進入道路等の附帯工事範囲が菅ノ沢遺跡の南端に接するものであったため、宮城県教育委員会では平成17年9月29日と11月7・8日に、遺跡範囲の確定と工事とのかかわりを把握するための確認調査を実施した。その結果、遺跡範囲が從来想定されていたものよりも南側に伸びることが確認され、今回、事前調査を実施したものである。

第Ⅱ章 遺跡の概要と周辺の遺跡

菅ノ沢遺跡は、宮城県中央部の黒川郡富谷町穀田字菅ノ沢・花ノ沢に所在する。遺跡が所在する宮城県中央部の地形をみると、西側には奥羽山脈が南北に走り、標高約1500mの船形山を頂とする船



第1図 菅ノ沢遺跡と周辺の遺跡

形火山地から東へ丘陵地がのび、吉田川低地をはさんで北に大松沢丘陵、南に富谷丘陵がのびている。その富谷丘陵の中央部に富谷町は位置しており、丘陵地は東流する関川・西川によって形成された沖積地により町内において南北に二分される。そのうち南部は標高 60 ~ 80m の 5 つの小丘陵が南北に樹枝状にのびている。遺跡は富谷丘陵南部の 5 つの小丘陵の中で、西川に向かって流れる明石川左岸の小丘陵西側の沢に面したせまい台地上に立地している。

菅ノ沢遺跡は東北縦貫自動車道建設に伴う分布調査で発見された遺跡である。近年は畠地、水田(現在休耕)及び墓地として利用されており、台地上の畠地に平安時代の土師器の散布が認められた。昭和 47 年の東北縦貫自動車道建設に伴う事前調査では台地の西裾が調査対象となったが、遺構・遺物は発見されなかった(宮教委:1982)。

本遺跡と同一丘陵上には、縄文・古代の遺跡や中世の城館跡、中世の経塚や近世の十三塚等が 10 箇所存在し、沢をはさんだ西側の小丘陵上には、縄文・古代の遺跡や中世の城館跡が 7 箇所存在する。本遺跡より約 2.5km 北の原前南遺跡では昭和 47 年に宮城県教育委員会により発掘調査が実施されており、8 世紀前半や平安時代の竪穴住居跡が検出された他、縄文時代早期末から前期初頭の土器等が出土している(宮教委:前掲)。また、白鳥遺跡では平成 10 ~ 12 年に富谷町教育委員会により発掘調査が実施されており、奈良時代の掘立柱建物跡、材木痕跡、杭列跡等が検出された他、縄文時代や弥生時代の土器等が出土している(富教委:2003)。

第三章 発掘調査

1. 調査の方法と経過

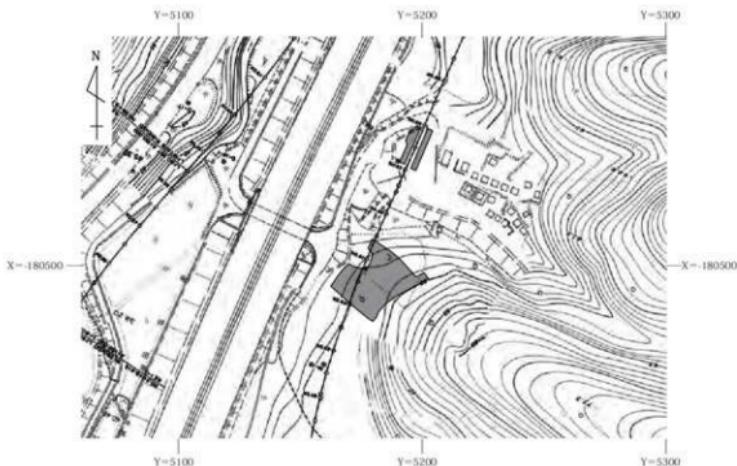
平成 17 年 9 ・ 11 月の確認調査結果を基に、遺構が確認された丘陵西側緩斜面を中心に調査区を設定した。調査面積は約 650m²である。また、丘陵斜面上方にある墓地駐車場への進入路が調査対象範囲内にあり、進入手段確保のため、この部分については付け替え道路設置後に行うこととした。

発掘調査は平成 18 年 7 月 3 日から開始し、2 日間は重機による表土除去と遺構確認作業を行った。その結果、調査区中央部に東西に、やや湾曲しながら平行して延びる溝跡 2 条を検出し、直ちに精査を開始した。なお、調査区の東西両側は後世の水田造成の際に大きく削平を受けており、溝跡の延びを確認することはできなかった。

遺構精査及び実測は 7 月 5 日から開始し、8 日から 17 日までの中断をはさみ、27 日まで行った。20 日には遺構の掘り上げおよび写真撮影を終了し、以後、平面図作成及び全体写真的撮影等を行い、27 日に墓地進入路部分を除く、すべての調査を終了した。また、墓地進入路部分については、付け替え道路建設後の 11 月 17 日に調査を行った。幅 2 ~ 3 m、長さ約 15m のトレーニングを 2 本設定し、遺構確認作業を行ったが、遺構・遺物は検出されなかった。

調査区や遺構の平面実測に際しては工事用基準杭をもとに任意の測量原点を設定し、電子平板による測量作業を行った。また適宜 1/20 の縮尺で断面図を作成し、併せて行った写真撮影では 1000 万画素クラスのデジタルカメラや 6 × 7 の中判カメラを使用した。

測量基準杭の国家座標は例言で示したとおりである。



第2図 調査区の位置 (S=1/2000)

2. 発見された遺構と遺物

今回の調査で検出した遺構は、時期不明の溝跡2条のみである。遺物については、溝跡、遺構確認面から縄文土器の小破片や石器が少量出土している（第4図）。

（1） 溝跡

丘陵裾部から尾根沿いに平行して延びる東西方向の溝跡2条を検出した。ともに調査区中央の地山面で検出され、重複は認められない。道路側溝の可能性も考えられるが、時期等の詳細は不明である。

【SD01 溝跡】（第3図）

検出長は約12.2m、幅約1.1m、深さ約24cmで、断面は浅い皿状を呈する。堆積土は7層に分けられ、すべて自然堆積土である。出土遺物は、堆積土から縄文土器の小破片の他、珪質頁岩製の石箇（第4図6）や磨石、剥片等が出土している。

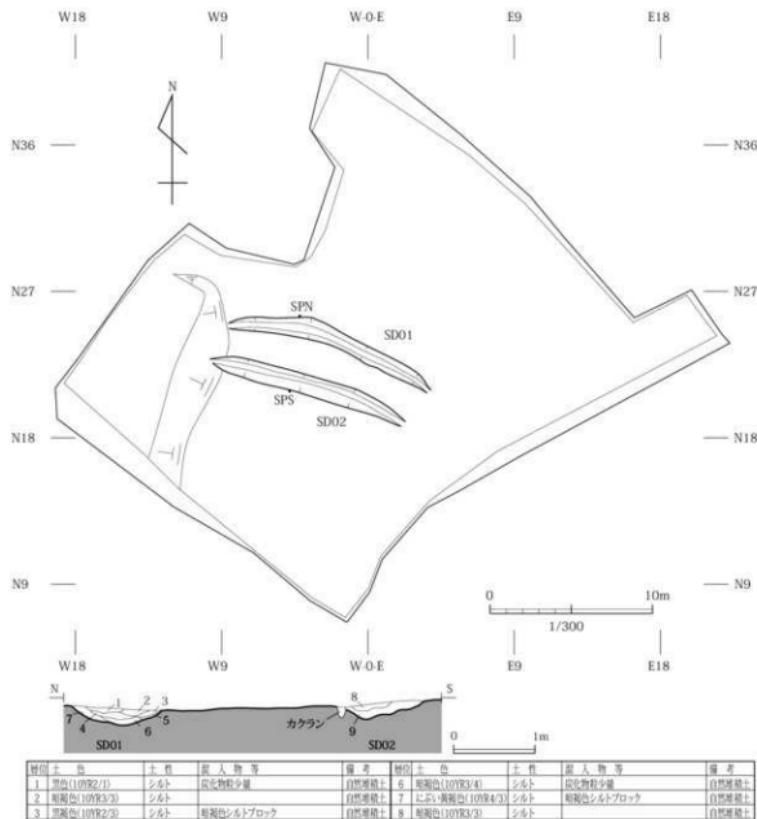
【SD02 溝跡】（第3図）

検出長は約12.2m、幅約1.2m、深さ約22cmで、断面は浅い皿状を呈する。堆積土は2層に分けられ、すべて自然堆積土である。出土遺物は、縄文土器の胴部破片（第4図3）の他、珪化凝灰岩製の石箇（4）、不定形石器等が出土している。

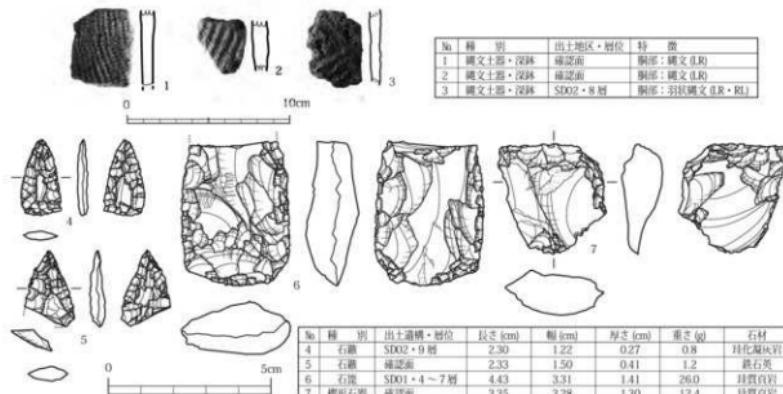
【参考文献】

宮城県教育委員会 1982 「菅ノ沢遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書VI』宮城県文化財調査報告書 第83集
富谷町教育委員会 2003 『白鳥遺跡発掘調査報告書—西成田交通安全工事に伴う埋蔵文化財の調査—』

宮城県富谷町文化財調査報告書 第4集



第3図 SD01・SD02



第4図 出土遺物



道路遠景（南西から）



調査区（西から）



1 : SD01・02 検出状況（西から）
2 : SD01 断面（西から）
3 : SD02 断面（西から）
4 : SD01・02 完掘（東から）
5 : SD01・02 完掘拡大（東から）



1～7 : 第4図1～7
(1～3 : S=1/3 4～7 : S=2/3)

旧大衡役場前遺跡

目 次

第Ⅰ章	調査に至る経過	49
第Ⅱ章	遺跡の概要と周辺の遺跡	49
第Ⅲ章	発掘調査	51
1.	調査の方法と経過	51
2.	発見された遺構と遺物	56
A	古代	
	(1) 掘立柱建物跡 (2) 穴状遺構 (3) 土壙	
B	近世	
	(1) 区画溝跡 (2) 掘立柱建物跡 (3) 井戸跡	
第Ⅳ章	考察	71
第Ⅴ章	まとめ	72
参考文献		72
写真図版		73

調査要項

1. 遺跡名 旧大衡役場前遺跡（宮城県遺跡登録番号：26070 遺跡記号：SY）
2. 所在地 宮城県黒川郡大衡村大衡字野畠 地内
3. 調査主体 宮城県教育委員会
4. 調査担当 宮城県教育庁文化財保護課 佐藤憲幸 豊村幸宏 志間貞治 小野章太郎
5. 調査期間 平成 18 年 8 月 21 日～10 月 17 日
6. 調査面積 約 1600m²

第Ⅰ章 調査に至る経過

本書は、一般国道4号富谷大和拡幅工事に伴って平成18年度に実施した大衡村旧大衡役場前遺跡の発掘調査報告書である。この工事は仙台市泉区七北田字大沢を起点、黒川郡大衡村大衡を終点とする総長13.3kmの区間を、幅24～30mに拡幅し、現在、暫定2車線で供用している道路を4車線化するための工事である。工事着手は昭和51年で、以後、全6工区に分割して順次、工事が進められてきた。その中で、今回、最も終点に近い第25-2工区の工事計画が立案され、ルート上に周知の遺跡である大衡村旧大衡役場前遺跡と同八幡神社南遺跡がかかることから、平成15年度に宮城県教育委員会と国土交通省東北地方整備局が協議を行った。それにより、工事が遺跡に与える影響が大きいと判断した旧大衡役場前遺跡については、平成16年9月に遺跡範囲の確定と工事とのかかわりを把握するための確認調査を実施することとし、調査の結果、多数の溝跡や土壌、ピット等が発見されたことから、今回、事前調査を実施したものである。

第Ⅱ章 遺跡の概要と周辺の遺跡

旧大衡役場前遺跡は、宮城県中央部の黒川郡大衡村大衡字野畑に所在し、縄文時代と古代の複合遺跡として周知の遺跡である。遺跡が所在する宮城県中央部は、西側に奥羽脊梁山脈が南北に走り、その一峯である船形山を頂とする船形火山地から東へ丘陵地のがび、吉田川をはさんで北に大松沢丘陵、南に富谷丘陵がのがびている。大衡村の大部分はその大松沢丘陵の中央部に位置しており、村内においては大衡丘陵と呼ばれる。その大衡丘陵と富谷丘陵の間には、吉田川とその支流により開析された吉田川低地が発達している。吉田川低地においては、吉田川とその支流域に河岸段丘が発達しており、段丘は最高位・高位・中位・低位・最低位の5群に大別される（北村ほか：1983）。遺跡は吉田川の支流である善川の南、低位段丘（吉岡段丘下段）上に立地している。

吉田川やその支流域は県内において遺跡の最も多い地域の一つである。本遺跡の位置する善川南岸の段丘やその周辺にも、縄文時代や古代などの遺跡が数多く分布しており（第1図）、それらの中で本遺跡と同じく善川南岸の段丘や丘陵上にあり、過去に本格的発掘調査が行われた主な遺跡としては、以下の5遺跡があげられる。

〔天皇寺遺跡（大和町）〕

平成元年に宮城県教育委員会により発掘調査が行われ、平安時代の製鉄遺構や、17世紀初め～18世紀代の掘立柱建物跡や井戸跡などが検出されている（宮教委：1990）。

〔蒲切沢遺跡（大衡村）〕

平成2年に宮城県教育委員会により発掘調査が行われ、縄文時代中期および後期の遺物が出土しているほか（宮教委：1991）、昭和56年の圃場整備の工事の際に、住居跡や貯蔵穴などが多く存在することが確認されている。

〔一里塚遺跡（大和町）〕

昭和63年から土地区画整理事業や道路拡幅などに伴う事前調査などが行われており、8世紀後半



No.	道跡名	種別	時代	No.	道跡名	種別	時代	No.	道跡名	種別	時代
1	旧大衛役場前遺跡	散布地	縄文・古代	19	寺沢遺跡	散布地	古代	37	楓木D遺跡	散布地	縄文
2	金谷遺跡	散布地	縄文・中・後	20	吉田遺跡	城跡	中世	38	大衛中央校東遺跡	散布地	縄文
3	石神D遺跡	散布地	縄文・平安	21	松本B・C遺跡	散布地	古代	39	長原A遺跡	散布地	古代
4	中興寺遺跡	散布地	縄文	22	大衛城跡	城跡・散布地	縄文・中世	40	長原B遺跡	散布地	縄文
5	古同遺跡	散布地	縄文・近世	23	六幡神社南遺跡	散布地	縄文	41	長原C遺跡	散布地	古代
6	安樂院遺跡	散布地	縄文・中・後	24	六幡神社北遺跡	散布地	縄文	42	跡式道路	散布地	縄文
7	串遺跡	散布地	古代	25	六幡神社北遺跡	散布地	縄文	43	唐田金沢遺跡	散布地・製鉄	縄文前・後・古代
8	南今合中遺跡	散布地	縄文	26	平林遺跡	散布地	縄文・古代	44	坂ノ沢遺跡	散布地	縄文
9	一ノ坂遺跡	散布地	縄文・中・古代	27	大畠遺跡	散布地	縄文	45	前沢A遺跡	散布地	縄文・古代
10	浮遺跡	散布地	縄文・中	28	龜岡遺跡	散布地	縄文中・晚・古代	46	前沢B遺跡	散布地	縄文
11	東新野寺遺跡	散布地	縄文・古代	29	龜岡六塙	古墳	古墳	47	五十沢遺跡	散布地	縄文・古代
12	天皇寺遺跡	集落	縄文・平安・近世	30	中山遺跡	散布地	縄文	48	苗代沢遺跡	散布地	縄文・古代
13	一ノ塙遺跡	集落・官衙	縄文・奈良～中世	31	小舟野遺跡	散布地	縄文・中	49	薩切沢遺跡	散布地	縄文早・中世
14	一甲塙	一甲塙	近世	32	小舟野B遺跡	散布地	縄文・中・後	50	中塙A遺跡	集落	縄文・平安
15	希羅遺跡	散布地	縄文・中・古代	33	四反田遺跡	散布地	縄文早・前	51	中塙B遺跡	集落	縄文早・後・海生・古代
16	海老寺遺跡	散布地	縄文・中	34	楓木A遺跡	散布地	縄文	52	中塙C遺跡	集落	平安
17	安吉遺跡	散布地	古代	35	楓木B遺跡	散布地	古代	53	童子沢遺跡	散布地	縄文
18	松木遺跡	散布地	縄文・古代	36	楓木C遺跡	散布地	縄文	54	瀬戸原遺跡	散布地	縄文・古代

第1図 旧大衛役場前遺跡と周辺の遺跡

から9世紀初頭頃の郡衙に付隨する「倉庫院」と考えられる官衙施設や、外郭に区画施設を伴う集落の存在などが判明している（宮教委：1989・1990・1999他）。

〔中峯A～C遺跡（大和町）〕

昭和57・58年に宮城県教育委員会により発掘調査が行われ、中峯B遺跡から縄文時代前期の竪穴住居跡が、また、中峯AおよびC遺跡から竪穴住居跡や掘立柱建物跡などが検出され、これらは9世紀の集落遺跡とされている（宮教委：1985）。

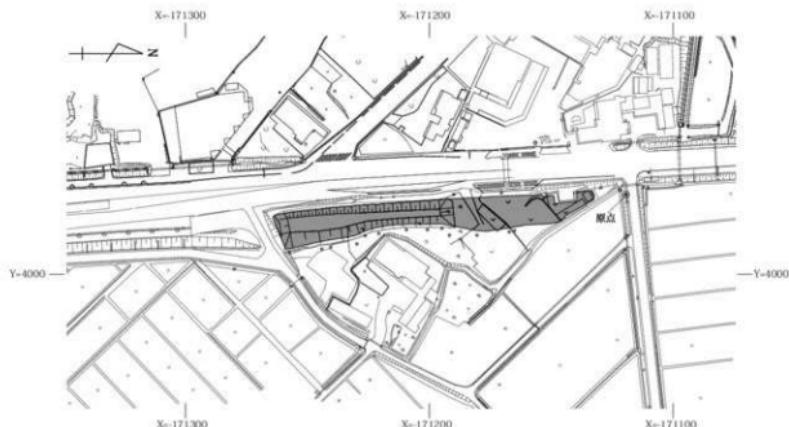
また、上記遺跡の他、本遺跡の1.5km北西にあり、善川と埋川にはさまれた丘陵上に立地する龜岡遺跡（大和町）においても3度の発掘調査が行われている。昭和52年の東北学院大学考古学研究部による調査では、竪穴住居跡や掘立柱建物跡、土器焼成遺構などが検出されている（東北学院大学考古学研究部：1979）。また、平成6・7年には宮城県教育委員会が調査を担当して、村道改良工事や駐車場造成工事に伴う事前調査が行われ、9世紀初頭頃の竪穴住居跡、掘立柱建物跡などが検出されている（大教委：1995、宮教委：1996）。

第III章 発掘調査

1. 調査の方法と経過

今回の調査区は遺跡の北東端部にあたり、東へ緩やかに傾斜している。平成16年9月の確認調査結果を基に、遺構が確認された範囲を中心とし調査区を設定した。調査面積は約1,600m²である。

発掘調査は平成18年8月21日から開始し、8月29日まで重機による表土除去と遺構確認作業を行った。その結果、掘立柱建物跡9棟、竪穴状遺構1基、井戸跡1基、土壙2基の他、多数の溝跡とピットなどを検出し、直ちに遺構の精査・実測を開始した。その後、10月13日までにこれら



第2図 調査区の位置 (S=1/2000)

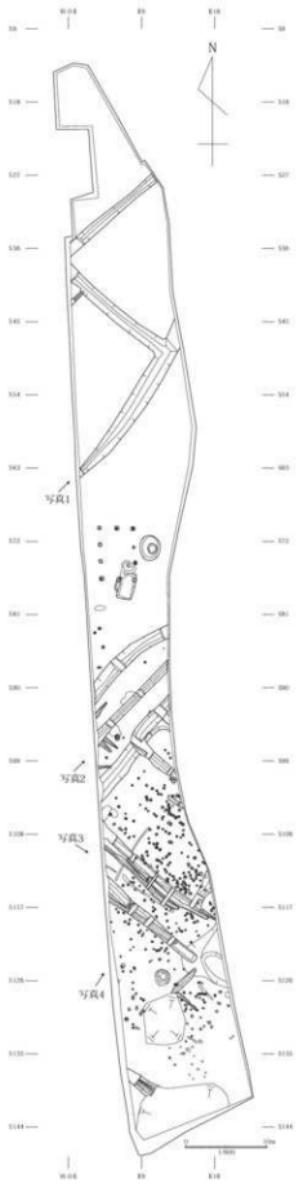


写真1(南西から)



写真2(南西から)

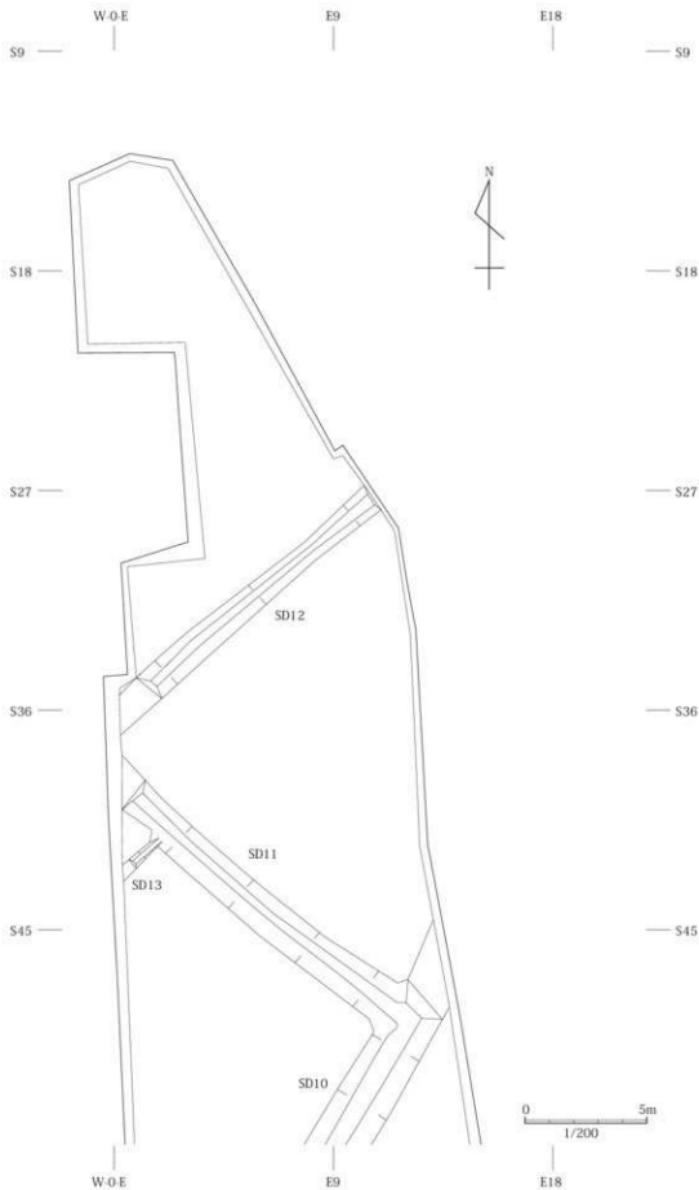


写真3(北西から)

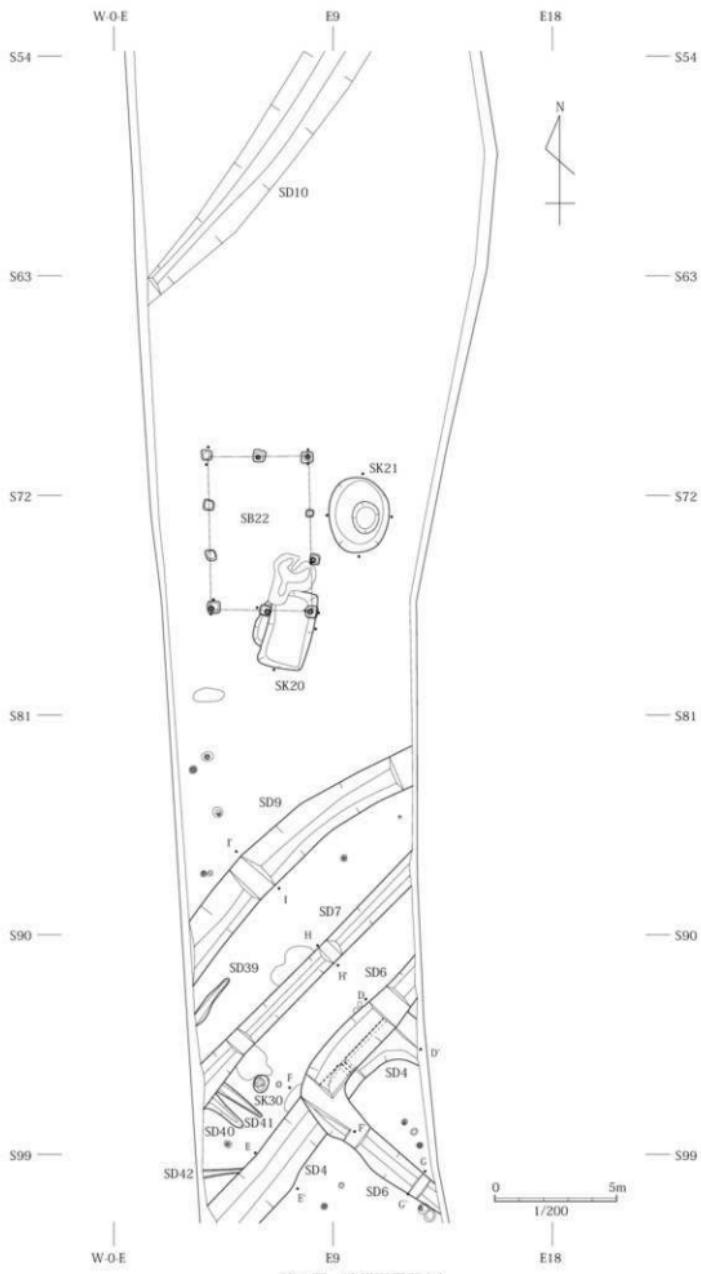


写真4(南西から)

第3図 遺構全体図



第4図 遺構配置図(1)



第5図 遺構配置図(2)



第6図 遺構配置図(3)

の作業を終え、10月16日より2日間、調査区の埋め戻しを行い、すべての調査を終了した。

遺構等の平面図の実測に際しては、調査区北壁付近に設置された工事用基準杭TC 1を測量原点として、電子平板による測量作業を行い、また適宜1/20の縮尺で断面図を作成し、併せて1000万画素クラスのデジタルカメラで写真撮影も行った。測量基準杭の国家座標は例言で示したとおりである。

2. 発見された遺構と遺物

今回の調査で検出した遺構は、区画溝跡12条、掘立柱建物跡9棟、竪穴状遺構1基、井戸跡1基、土壙2基、小溝跡12条の他、多数のピットなどであり、これらの遺構は出土遺物や堆積土の特徴などから古代のものと近世のものに分けられる。以下、精査をおこなった主要な遺構について時代順に説明する。

A 古代

調査区中央において、掘立柱建物跡1棟、竪穴状遺構1基、土壙2基等を検出した。遺物については、竪穴状遺構と土壙の堆積土等を中心に、土師器、須恵器、鉄製品などが整理用コンテナで4箱出土している。

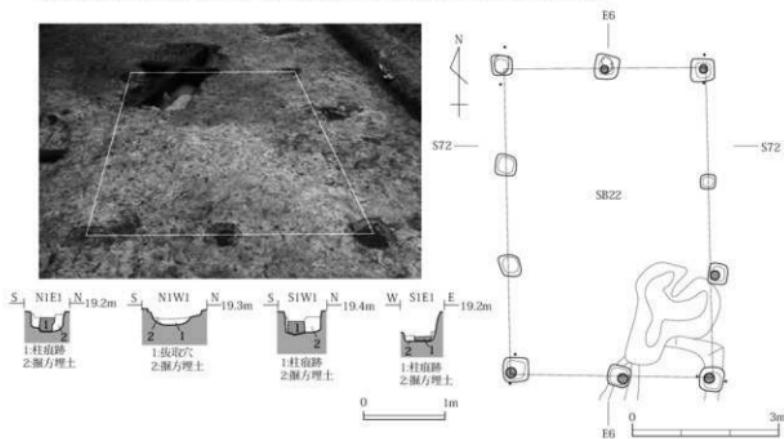
(1) 掘立柱建物跡

【SB22 掘立柱建物跡】(第7図)

【位置】調査区中央〔確認面〕地山〔重複〕SX20と重複し、これより新しい。

【構造】東西2間、南北3間の南北棟建物跡である。

【規模】桁行は東側柱列で総長約6.4m、柱間寸法は北から推定2.3m・推定1.9m・約2.1mである。梁行は南妻で総長約4.1m、柱間寸法は西から約2.3m・約1.8mである。



第7図 SB22 掘立柱建物跡

[柱穴・柱痕跡] 柱穴は10個検出し、この内、6箇所で柱痕跡、2箇所で抜取穴が認められた。柱穴の平面形は直径長一辺31~51cmの隅丸方形で、深さは10~35cmである。柱痕跡は直径約18~21cmの円形である。堆積土は掘り方埋土が地山ブロックを多量に含む黒~黒褐色シルト、柱痕跡がしまりのない黒褐色シルトである。

[方向] 西側柱列でみると、北で西に約1°偏している。

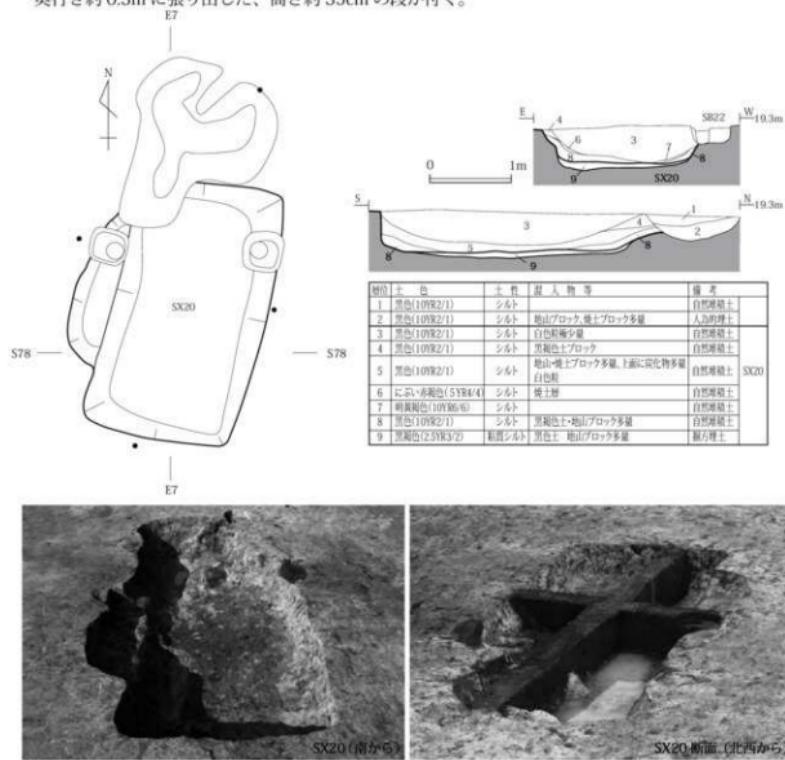
[出土遺物] 掘り方埋土から非クロロ調整の土師器表と底部回転ヘラ切り無調整の須恵器坏の小破片が極少量出土している。

(2) 穴状遺構

[SX20 穴状遺構] (第8図)

[位置] 調査区中央 [確認面] 地山 [重複] SB22と重複し、これより古い。

[規模・平面形] 長辺3.2m、短辺1.8mの隅丸長方形を呈し、西側には入口と考えられる、幅約1.5m、奥行き約0.3mに張り出した、高さ約35cmの段が付く。



第8図 SX20 穴状遺構

【堆積土】7層に細分される。最下層が掘方埋土、他はすべて廃絶後の自然堆積土である。

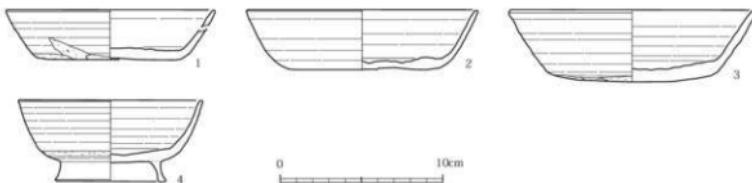
【壁】地山を壁としている。壁は北辺は緩やかに、その他は急に立ち上がっており、壁高は南壁で床面から50cm程ある。

【床】掘方埋土を床としている。床面はほぼ平坦で若干の硬化が認められる。

[出土遺物]

堆積土から須恵器壺・高台壺・甕の他、非口クロ調整の土師器甕が出土しているが破片が多く、図示できたものは須恵器壺と高台壺の4点のみである（第9図）。

須恵器壺・高台壺は体部から口縁部にかけて直線的に外傾して立ち上がっており、底部は壺はヘラ切りや静止糸切り後、手持ちケズリされるもの（1・3）と、ヘラ切り後無調整のもの（2）がある。高台壺は回転ヘラケズリ調整された後、高さ1.3cm程の高台が付く。



No.	種別	出土割位	特徴	口径	底径	高さ	残存
1	須恵器 壺	堆積土3層	内外面：ロクロナデ 体下～底部：静止糸切一手持ケズリ	(12.9)	8.9	3.1	1/4
2	須恵器 壺	堆積土3層	内外面：ロクロナデ 底部：ヘラ切 内外面：火拂	14.3	9.6	3.7	2/3
3	須恵器 壺	堆積土3層	内外面：ロクロナデ 体下～底部：ヘラ切一手持ケズリ 半や焼成不良	15.2	9.6	4.4	1/2
4	須恵器 高台壺	堆積土	内外面：ロクロナデ 外面：火拂	11.4	6.8	5.0	2/5

第9図 SX20 積穴状遺構出土遺物

(3) 土壌

[SK21 土壌] (第10図)

【位置】調査区中央【確認面】地山【重複】なし。

【規模・平面形・断面形】上面は長径約3.1m、短径約2.5mの楕円形を呈する。深さは約0.3mで、底面はやや南東寄りが長径約1.3m、短径約1.1mの楕円形状に10cm程深くなっている、凹凸が認められる。

【堆積土】7層に細分され、底面に黒褐色シルト（6・7層）が自然堆積した後、焼土や地山を含む黒褐色シルトや極暗褐色シルト等で人為的に埋め戻されている。

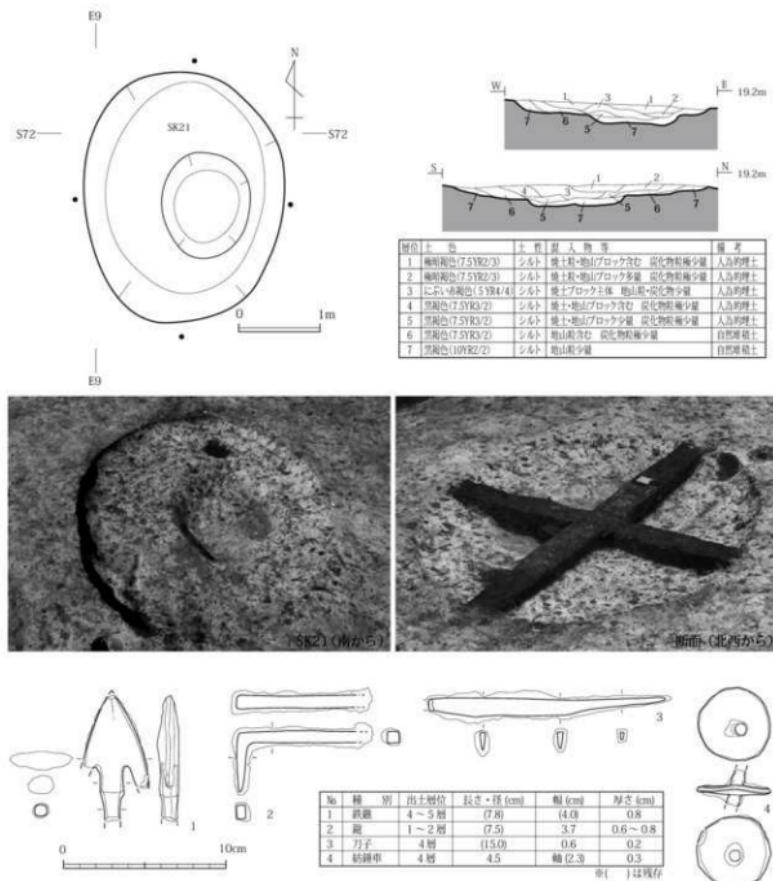
[出土遺物]

人為的埋土層である第1～5層を中心土師器壺・高台皿・甕、須恵器壺・高台壺・鉢・壺・甕、鉄製の鎌・刀子・鎌・紡錘車・釘、繩文土器、石核等が整理用コンテナで約1.5箱出土している（第10・11図）。

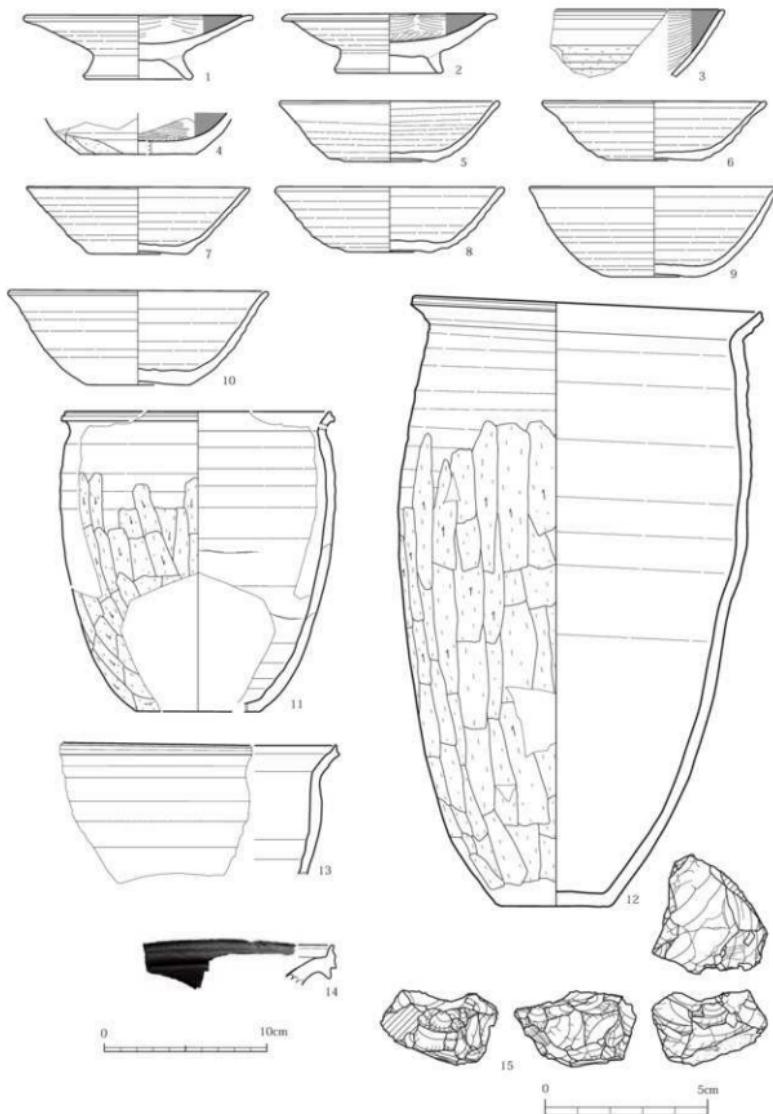
土師器はすべてロクロ調整である。壺は破片の為、全体の器形を知り得るものはないが、外面に回転ヘラケズリや手持ちヘラケズリ調整されているものがある（3・4）。高台皿は底部、回転糸切り後、

高さ 1.1 ~ 1.2cm 程の高台が付き、内面はヘラミガキ後黒色処理が施されている（1・2）。甕は長胴形のもの（12）と小型のもの（11）があり、外面がヘラケズリ調整されている。

須恵器環は、底部から口縁部にかけて直線的に外傾するもの（7）、底部から内湾気味に立ち上がるるもの（5・6・8・9・10）がみられ、さらに後者には口縁端部がやや外反するもの（6・9・10）もみられる。底部は破片で出土した 1 点を除き、回転糸切り無調整のものである。鉢は口頸部が「く」字状に外反し口縁端部が突帯状となる（13）。甕は口縁端部の上下を細くつまみ出して突帯状となっている（14）。



第 10 図 SK21 土壌及び出土遺物（鉄製品）



第11図 SK21 土壌出土遺物（土器・石器）

SK21土器・石器觀察表

No.	種 別	出土層位	特 徴	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存
1	土師器 高台面	1～5層	外面：ロクロナデ 内面：ミガキ一黒色陶理 脱漆：回転系切	(14.2)	6.8	4.0	3/5
2	土師器 高台面	2層	外面：ロクロナデ 内面：ミガキ一黒色陶理 脱漆：回転系切	13.3	6.7	3.7	ほぼ完形
3	土師器 环	1～2層	外面：ロクロナデ 内面：ミガキ一黒色陶理 体下部：回転ケズリ				破片
4	土師器 环	1～2層	外面：ロクロナデ 内面：ミガキ一黒色陶理 体下部：手持ケズリ			(7.2)	破片
5	須恵器 环	2層	内・外面：ロクロナデ 脱漆：回転系切	13.6	5.8	3.7	2/3
6	須恵器 环	1～5層	内・外面：ロクロナデ 脱漆：回転系切	13.9	6.1	3.6	2/5
7	須恵器 环	1～5層	内・外面：ロクロナデ 脱漆：回転系切	(13.8)	6.1	4.1	1/5
8	須恵器 环	1～5層	内・外面：ロクロナデ 脱漆：回転系切	14.2	5.4	4.0	2/5
9	須恵器 环	1～2層	内・外面：ロクロナデ 脱漆：回転系切	(15.4)	6.3	5.5	1/3
10	須恵器 环	3層	内・外面：ロクロナデ 脱漆：回転系切	16.0	6.4	5.8	完形
11	土師器 瓢	1～5層	外面：ロクロナデ 手持ケズリ 内面：ロクロナデ	(16.3)	(7.6)	18.4	1/6
12	土師器 瓢	3～4層	外面：ロクロナデ 手持ケズリ 内面：ロクロナデ	21.8	7.3	37.5	ほぼ完形
13	須恵器 瓢	3層	内・外面：ロクロナデ				破片
14	須恵器 瓢	6層	内・外面：ロクロナデ				破片
15	石核	6層	石材：墨礫石	長2.20	幅3.50	厚3.67	重25.6g

B 近世

調査区南側を中心に区画溝跡 12 条、掘立柱建物跡 8 棟、井戸跡 1 基、小溝跡 12 条の他、多数のピットを検出した。遺物は区画溝跡を中心に陶器等が極少量出土したのみである。

(1) 区画溝跡

調査区南側において「T」字状に接続、あるいは「L」字状に折れ曲がると考えられる溝跡を 12 条検出した（第 3 図）。周辺では掘立柱建物跡のほか多数のピットが検出されており、溝跡はこうした建物群を区画したものと推定される。調査区が南北に細長いため全体の規模が判明するものはないが、ここでは区画溝として扱い、以下で詳述する。

【SD 1 溝跡】(第 6・12 図)

【位置】調査区南〔確認面〕地山〔重複〕なし。

【規模・方向・断面形】北西から南東方向へ延びる溝跡で検出長は約 4.7 m、西側は調査区外に延び、東側はカクランにより壊されている。幅約 1.7 m、深さは約 0.3m で、壁は緩やかに立ち上がり、底面には凹凸が認められる。

【方向】東で南に約 36° 傾している。

【堆積土】堆積土は 7 層に分けられ、灰黄褐色砂質シルト等が自然堆積している。

【出土遺物】堆積土から近世陶器の小破片（写真図版 7-19）が 1 点出土した他、須恵器環・甌が極少量出土している。

【SD 2 溝跡】(第 6・12 図)

【位置】調査区南〔確認面〕地山〔重複〕SD 8 と重複し、これより古い。

【規模・方向・断面形】北西から南東方向へ延びる溝跡で検出長は約 14.6 m、西側は調査区外に延びている。幅約 1.4 m、深さは約 0.7m で、東端から約 10.5m 北西側には幅約 0.4 m、高さ約 0.5m の仕切りが設けられている。壁は急に立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。

【方向】東で南に約 41° 傾している。

【堆積土】堆積土は 7 層に分けられ、黒褐色シルト等が自然堆積した後、地山ブロックを多く含む褐灰色砂質シルトや黒褐色シルト等で人為的に埋め戻されている。

〔出土遺物〕堆積土から近世陶器碗の小破片(写真図版7-15)が1点出土した他、土師器甕・須恵器甕・甕、磨石等が出土している。

【SD 3・17溝跡】(第6・12図)

「T」字状に接続する溝跡で、北西から南東方向へ延びる溝跡をSD3、北東から南西方向へ延びる溝跡をSD17とした。

〔位置〕調査区南〔確認面〕地山〔重複〕SD15と重複し、これより新しい。

〔堆積土〕堆積土は5層に分けられ、底面に暗褐色シルトが薄く堆積した後、地山ブロックを多く含む暗褐色シルトで人為的に埋め戻されている。

〔出土遺物〕土師器甕や須恵器甕の小破片がそれぞれ極少量出土している。

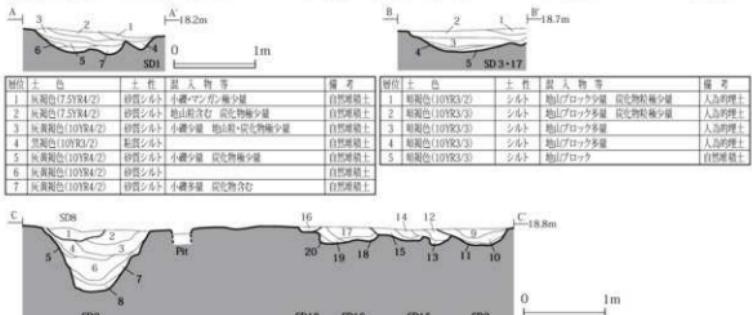
〈SD 3溝跡〉

〔規模・方向・断面形〕検出長は約18.4m。両側は調査区外に延びている。幅約0.3~1.3m、深さは約0.2mで、壁は南側が緩やかに、北側はやや急に立ち上がっており、断面形は「U」字状に近い。

〔方向〕東で南に約38°偏している。

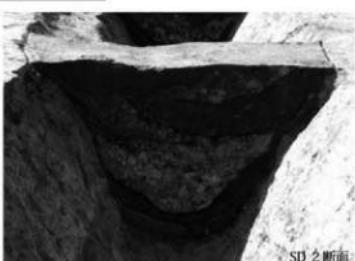
〈SD17溝跡〉

〔規模・方向・断面形〕検出長は5.0m。北側は調査区外に延びている。幅約1.1~1.5m、深さは



層位	土色	土性	見入物等	備考
1	水褐色(10YR4/2)	砂質シルト	小礫・マンゴン等少量	自然堆積土
2	灰褐色(10YR4/2)	砂質シルト	地山表面含む 硬化物微少量	自然堆積土
3	灰褐色(10YR4/2)	砂質シルト	小礫少量 地山表面・炭化物微少量	自然堆積土
4	灰褐色(10YR4/2)	砂質シルト		自然堆積土
5	灰褐色(10YR4/2)	砂質シルト	小礫少量 硬化物微少量	自然堆積土
6	灰褐色(10YR4/2)	砂質シルト	小礫少量 碳化物微少量	自然堆積土
7	灰褐色(10YR4/2)	砂質シルト	小礫多量 碳化物含む	自然堆積土

層位	土色	土性	見入物等	備考
1	暗褐色(10YR3/2)	シルト	地山表面・炭化物微少量	自然堆積土 SD8
2	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山表面・炭化物多量	人為的理土
3	暗褐色(10YR2/2)	シルト	地山・炭化物少量	人為的理土
4	暗褐色(10YR4/1)	砂質シルト	地山・ワロタ層・炭化物微少量	人為的理土
5	暗褐色(10YR2/2)	シルト	地山表面少量 地山・炭化物微少量	人為的理土 SD2
6	灰褐色(10YR6/4)	砂質シルト	地山表面少量	人為的理土
7	暗褐色(10YR3/1)	シルト	地山表面少量 碳化物微少量	自然堆積土
8	暗褐色(10YR4/1)	砂質シルト	地山・ワロタ層・炭化物多量	自然堆積土
9	暗褐色(10YR2/3)	シルト	地山・ワロタ層多量 碳化物微少量	人為的理土
10	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山・ワロタ層多量	人為的理土 SD3
11	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山・ワロタ層	自然堆積土
12	灰褐色(10YR6/4)	シルト	地山表面少量	人為的理土
13	暗褐色(10YR4/1)	シルト	地山・ワロタ層多量	人為的理土
14	灰褐色(10YR6/4)	シルト	地山表面少量	人為的理土
15	暗褐色(10YR4/1)	シルト	地山・ワロタ層多量	人為的理土
16	暗褐色(10YR2/3)	シルト	地山表面少量	自然堆積土 SD18
17	暗褐色(10YR3/2)	シルト	地山表面少量	人為的理土
18	暗褐色(10YR2/2)	シルト	地山表面少量に含む	人為的理土
19	暗褐色(10YR2/2)	シルト	地山・ワロタ層多量	人為的理土
20	暗褐色(10YR4/1)	シルト	地山・ワロタ層多量	人為的理土



第12図 SD 1~3・8・15~18溝跡

約 0.3m で、壁は西側が緩やかに、東側はやや急に立ち上がっており、断面形は皿状に近い。

[方向] 北で東に約 40° 傾している。

【SD 4溝跡】(第5・13図)

[位置] 調査区中央南側〔確認面〕地山〔重複〕SD6 と重複し、これより古い。

[規模・方向・断面形] 南西から北東方向へ延び、調査区東端で南東側へ「L」字状に屈曲する溝跡である。検出長は約 12.6 m、両側は調査区外に延びている。幅約 2.2 m、深さは約 0.8m で、屈曲点から約 2.5 m 南西側では SD 2 と同様に幅約 0.4 m、高さ 0.3m の仕切りが設けられている。壁は急に立ち上がり、断面形はほぼ逆台形を呈する。

[方向] 北東方向でみると、北で東に約 39° 傾している。

[堆積土] 堆積土は 10 層に分けられ、暗～黒褐色シルト等が自然堆積している。

[出土遺物] 堆積土から近世陶器（写真図版 7-16）、土師器甕、須恵器壺・甕が極少量出土している。

【SD 6溝跡】(第5・13図)

[位置] 調査区中央南側〔確認面〕地山〔重複〕SD 4 と重複しこれより新しい。

[規模・方向・断面形] 北東から南西方向へ延びた後、南東側へ「L」字状に屈曲する溝跡である。検出長は約 12.7 m、両側は調査区外に延びている。幅約 1.6 m、深さは約 0.4m で、壁はやや緩やかに立ち上がり、断面は皿状を呈する。

[方向] 北東方向でみると、北で東に約 44° 傾している。

[堆積土] 堆積土は 7 層に分けられ、黒褐色シルト等が自然堆積している。

[出土遺物] 堆積土から近世陶器碗、甕、すり鉢（写真図版 7-17・20・21）の他、中世陶器（写真図版 7-18）、土師器壺・甕、須恵器壺の破片がそれぞれ極少量出土している。

【SD 7溝跡】(第5・13図)

[位置] 調査区中央南側〔確認面〕地山〔重複〕小溝等と重複し、これより新しい。

[規模・方向・断面形] 北東から南西方向へ延びる溝跡である。検出長は約 12.5 m で両側は調査区外に延びている。幅約 1.2 m、深さは約 0.2m で、壁は緩やかに立ち上がり、断面形は一部凹凸がみられるが、ほぼ皿状を呈する。

[方向] 北で東に約 45° 傾している。

[堆積土] 堆積土は 7 層に分けられ、暗～黒褐色シルト等が自然堆積している。

[出土遺物] 土師器甕や須恵器壺・甕の破片がそれぞれ極少量出土している。

【SD 8溝跡】(第6・12図)

[位置] 調査区南〔確認面〕地山〔重複〕SD2 と重複し、これより新しい。

[規模・方向・断面形] 北西から南東方向へ延びる溝跡である。検出長は約 10.0 m で西側は調査区外に延びている。幅約 0.8 m、深さは約 0.2m で、壁は緩やかに立ち上がり、断面形は皿状を呈する。

[方向] 東で南に約 33° 傾している。

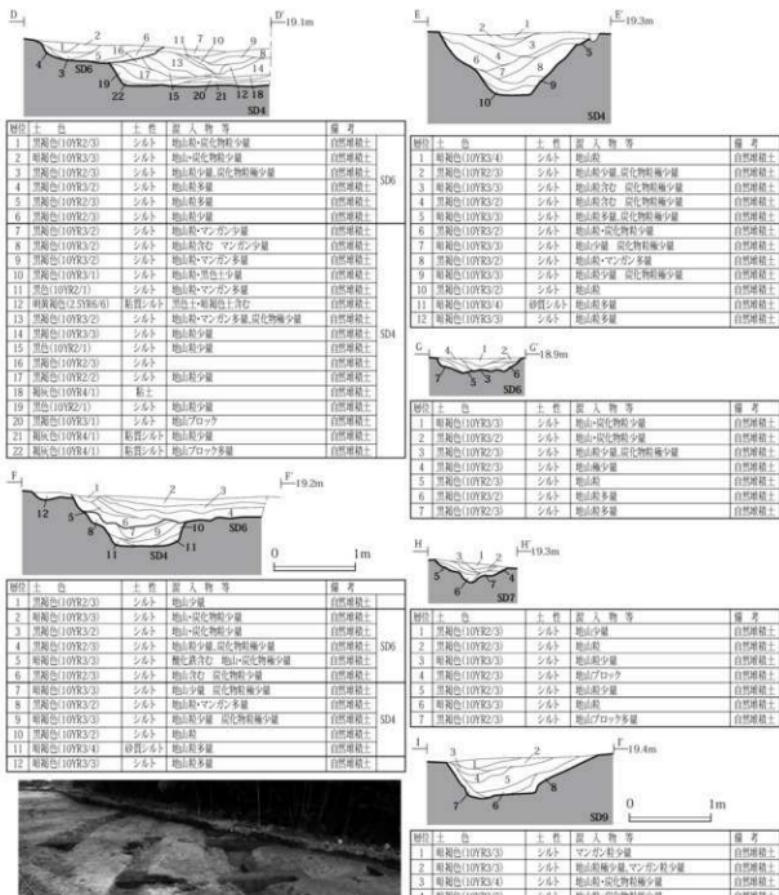
[堆積土] 堆積土は 1 層で、地山や炭化物粒を含む黒褐色シルトが自然堆積している。

[出土遺物] 出土していない。

【SD 9溝跡】(第5・13図)

〔位置〕調査区中央南側 〔確認面〕地山 〔重複〕なし。

〔規模・方向・断面〕 北西から南東方向へやや湾曲しながら延びる溝跡である。検出長は約12.4mで両側は調査区外に延びている。幅約1.8m、深さは約0.5mで、壁は南側(湾曲内側)はやや



第13図 SD 4:6:7:9 溝跡

急に、北側は緩やかに立ち上がっており、断面形は逆台形を呈する。

【方向】東で北に約 42° 傾している。

【堆積土】堆積土は 8 層に分けられ、暗～黒褐色シルト等が自然堆積している。

【出土遺物】近世陶器が 1 点（写真図版 7-22）、土師器甕、須恵器甕・甕の破片がそれぞれ極少量出土している。

【SD15 溝跡】（第 6・12 図）

【位置】調査区南〔確認面〕地山〔重複〕SD 3・16 と重複し、SD3 より古く、SD16 より新しい。

【規模・方向・断面形】北西から南東方向へ延びる溝跡で、検出長は約 12.3 m である。幅 0.4 ~ 0.9 m、深さは約 0.2m で、壁は緩やかに立ち上がり、底面には凹凸が認められる。

【方向】東で南に約 36° 傾している。

【堆積土】堆積土は 4 層に分けられ、地山ブロックを多く含む褐灰色シルト等で人為的に埋め戻されている。

【出土遺物】出土していない。

【SD16 溝跡】（第 6・12 図）

【位置】調査区南〔確認面〕地山〔重複〕SD15・18 と重複し、これらより古い。

【規模・方向・断面形】北西から南東方向へ延びる溝跡で、検出長は約 12.1 m。西側は調査区外に延びている。幅 0.4 ~ 0.8 m、深さは約 0.2m で、壁はやや急に立ち上がっており、底面には凹凸が認められる。

【方向】東で南に約 40° 傾している。

【堆積土】堆積土は 4 層に分けられ、地山ブロック等を含む黒褐色シルト等で人為的に埋め戻されている。

【出土遺物】須恵器甕の破片が 1 点出土している。

【SD18 溝跡】（第 6・12 図）

【位置】調査区南〔確認面〕地山〔重複〕SD16 やピット等と重複し、ピットより古く、SD16 より新しい。

【規模・方向・断面形】北西から南東方向へ延びる溝跡で、検出長は約 7.8 m、幅 0.2 ~ 0.5 m である。深さは約 0.1m で、壁は緩やかに立ち上がり、断面形は皿状を呈する。

【方向】東で南に約 35° 傾している。

【堆積土】堆積土は 1 層で、地山粒を少量含む黒褐色シルト等が自然堆積している。

【出土遺物】近世陶器が 1 点（写真図版 7-24）、土師器甕、須恵器甕の破片が極少量出土している。

（2）掘立柱建物跡

調査区南側では多数の柱穴が検出されたが、今回はこれらのうち柱筋の通りがよく柱穴相互の間隔に規則性が見出せたもの 8 棟を掘立柱建物跡として抽出した。

【SB31 掘立柱建物跡】（第 14 図）

【位置】調査区南〔確認面〕地山〔重複〕SB32・33・34・37 と重複するが、新旧関係は不明である。

【構造】東西1間、南北2間で、東側に廂もしくは縁を持つ南北棟建物跡である。

【規模】桁行は東入側柱列で総長約4.7m、柱間寸法は北から約2.4m・約2.3mである。梁行は南妻で総長約3.4mで、廂（または縁）の出は約1.5mである。

【柱穴・柱痕跡】柱穴は身舎で5個、廂（または縁）で3個検出し、すべてで柱痕跡が認められた。

柱穴の平面形は直径32～41cmの円形や不整円形で、深さは16～45cmである。柱痕跡は直径約14～21cmの円形である。堆積土は掘り方埋土が地山ブロック等を含む暗～黒褐色シルト、柱痕跡がしまりのない暗褐色シルトである。

【方向】西側柱列でみると、北で東に約33°偏している。

【出土遺物】掘り方埋土から土師器甕の小破片が出土している。

【SB32 堀立柱建物跡】(第14図)

【位置】調査区南〔確認面〕地山〔重複〕SD3、SB31・33・34・38と重複し、SD3より古い。他の新旧関係は不明である。

【構造】東西1間、南北2間の南北棟建物跡である。

【規模】桁行は東側柱列で総長約6.4m、柱間寸法は北から約3.0m・推定3.4mである。梁行は北妻で総長約3.1mである。

【柱穴・柱痕跡】柱穴は5個検出し、4箇所で柱痕跡が認められた。柱穴の平面形は直径32～49cmの円形や不整円形で、深さは21～26cmである。柱痕跡は直径約15～20cmの円形である。

堆積土は掘り方埋土が地山ブロック等を含む暗～黒褐色シルト、柱痕跡が暗褐色シルトである。

【方向】東側柱列でみると、北で東に約30°偏している。

【出土遺物】出土していない。

【SB33 堀立柱建物跡】(第14図)

【位置】調査区南〔確認面〕地山〔重複〕SB31・32と重複するが、新旧関係は不明である。

【構造】東西2間、南北2間の東西棟総柱建物跡である。

【規模】桁行は南側柱列で総長推定3.2m、柱間寸法は西から約1.6m・推定1.6mである。梁行は西妻で総長約2.6m、柱間寸法は南から約1.2m・約1.4mである。

【柱穴・柱痕跡】柱穴は8個検出し、6箇所で柱痕跡が認められた。柱穴の平面形は直径29～51cmの円形や不整円形で、深さは9～42cmである。柱痕跡は直径約12.1～18.8cmの円形である。堆積土は掘り方埋土が地山ブロック等を含む暗～黒褐色シルト、柱痕跡が暗褐色シルトである。

【方向】棟通の柱列でみると、東で南に約33°偏している。

【出土遺物】出土していない。

【SB34 堀立柱建物跡】(第14図)

【位置】調査区南〔確認面〕地山〔重複〕SD3、SB31・35～38と重複し、SD3より古い。他の新旧関係は不明である。

【構造】東西1間、南北3間以上で、東側に廂を持つ南北棟建物跡である。

【規模】桁行は西側柱列で総長6.8m以上、柱間寸法は南から約2.4m・約2.2m・約2.2mである。



第14図 SB31～38掘立柱建物跡

梁行は南妻で総長約 4.6 m、廂の出は約 1.1m である。

【柱穴・柱痕跡】 柱穴は身舎で 7 個、廂で 2 個検出し、すべてで柱痕跡が認められた。柱穴の平面形は直径 25 ~ 39cm の円形や不整円形で、深さは 23 ~ 54cm である。柱痕跡は直径約 11 ~ 19cm の円形である。堆積土は掘り方埋土が地山ブロック等を含む暗~黒褐色シルト、柱痕跡が暗褐色シルトである。

【方向】 西側柱列でみると、北で東に約 34° 傾している。

【出土遺物】 出土していない。

【SB35 堀立柱建物跡】(第 14 図)

【位置】 調査区南〔確認面〕 地山〔重複〕 SB34・36・37 と重複するが新旧関係は不明である。

【構造】 東西 1 間、南北 2 間以上で、東側に廂を持つ南北棟建物跡である。

【規模】 梁行は西側柱列で総長 5.4 m 以上、柱間寸法は南から約 2.6 m・約 2.8 m である。梁行は南妻で総長約 3.8 m、廂の出は約 1.1m である。

【柱穴・柱痕跡】 柱穴は身舎で 5 個、廂で 2 個検出し、すべてで柱痕跡が認められた。柱穴の平面形は直径 25 ~ 45cm の円形や不整円形で、深さは 18 ~ 48cm である。柱痕跡は直径約 12 ~ 30cm の円形である。堆積土は掘り方埋土が地山ブロック等を含む暗~黒褐色シルト、柱痕跡が暗褐色シルトである。

【方向】 西側柱列でみると、北で東に約 30° 傾している。

【出土遺物】 出土していない。

【SB36 堀立柱建物跡】(第 14 図)

【位置】 調査区南〔確認面〕 地山〔重複〕 SB34・35・36・37 と重複するが新旧関係は不明である。

【構造】 東西 2 間、南北 2 間以上で、東側に廂を持つ南北棟建物跡である。

【規模】 梁行は西側柱列で総長推定 5.5 m 以上、柱間寸法は南から推定 2.6 m・約 2.9 m である。梁行は南妻で総長推定 3.1 m、廂の出は約 1.2m である。

【柱穴・柱痕跡】 柱穴は身舎で 6 個、廂で 2 個検出し、7箇所で柱痕跡が認められた。柱穴の平面形は直径 25 ~ 42cm の円形や不整円形で、深さは 21 ~ 47cm である。柱痕跡は直径約 13 ~ 30cm の円形である。堆積土は掘り方埋土が地山ブロック等を含む暗~黒褐色シルト、柱痕跡が暗褐色シルトである。

【方向】 東入側柱列でみると、北で東に約 33° 傾している。

【出土遺物】 出土していない。

【SB37 堀立柱建物跡】(第 14 図)

【位置】 調査区南〔確認面〕 地山〔重複〕 SB31・34 ~ 36・38 と重複するが、新旧関係は不明である。

【構造】 東西 3 間、南北 2 間の東西棟建物跡である。

【規模】 梁行は南側柱列で総長推定 6.1 m、柱間寸法は北側柱列でみると西から約 1.9 m・約 2.1 m・推定 2.0 m である。梁行は西妻で総長約 3.7 m、柱間寸法は北から約 2.1 m・約 1.5 m である。

【柱穴・柱痕跡】 柱穴は 8 個検出し、7箇所で柱痕跡が認められた。柱穴の平面形は直径 20 ~

30cmの円形や不整円形で、深さは42～32cmである。柱痕跡は直径約13～17cmの円形である。

堆積土は掘り方埋土が地山ブロック等を含む暗～黒褐色シルト、柱痕跡が暗褐色シルトである。

【方向】南側柱列でみると、東で南に約30°偏している。

【出土遺物】出土していない。

【SB38 挖立柱建物跡】(第14図)

【位置】調査区南〔確認面〕地山〔重複〕SD 3・15・16・18、SB32・34・36等と重複するが、新旧関係は不明である。

【構造】東西2間、南北1間の東西棟建物跡である。

【規模】桁行は南側柱列で総長約6.3m、柱間寸法は西から約3.2m・約3.1mである。梁行は西妻で総長約4.3mである。

【柱穴・柱痕跡】柱穴は6個検出し、5箇所で柱痕跡が認められた。柱穴の平面形は直径28～38cmの円形や不整円形で、深さは24～37cmである。柱痕跡は直径約11～17cmの円形である。堆積土は掘り方埋土が地山ブロック等を含む暗～黒褐色シルト、柱痕跡が暗褐色シルトである。

【方向】北側柱列でみると、東で南に約33°偏している。

【出土遺物】出土していない。

(3) 井戸跡

【SE23 井戸跡】(第15図)

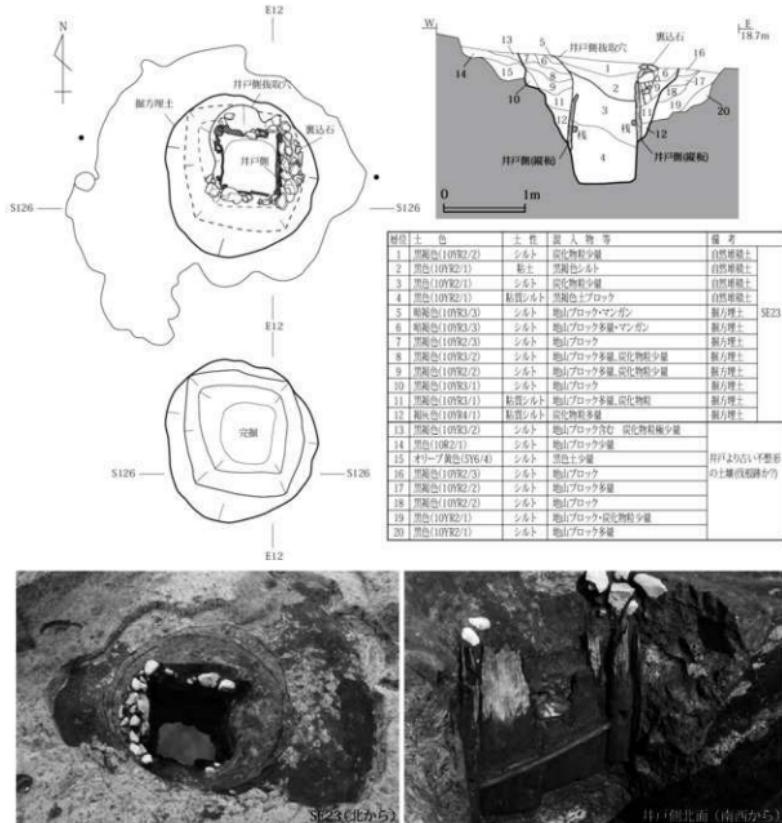
【位置】調査区南〔確認面〕地山

【重複】不整形の土壤と重複し、これより新しい。土壤については地山が上部に巻き上げられている堆積土の状況などから、井戸を掘る為に立木を伐根した痕跡と考えられる。

【構造】掘り方を掘り、木組みの井戸側を据えた井戸跡である。掘り方を埋める際には径10～20cm程の河原石を側の外側に込めて固定している。曲げ物は据えられていない。掘り方の平面形は上面が径約1.9mの円形、底面は一辺約0.7mの隅丸方形を呈する。深さは約1.6mで、断面形は漏斗形を呈する。井戸側は上部が抜き取られており、側の内法は一辺60cmで、板材を一辺に2～4枚、縦に並べて側としている。隅柱は側の内側にあり、それに組み込んだ横桟で保持している。横桟は一段確認でき、横桟と隅柱は、ほどで組まれている。側板は幅が30cm前後、厚さ2～3cm程である。隅柱は径13cm前後の丸材を使用しており、ほど穴は一辺6cm×4cm程の長方形である。横桟は一辺5cm程の角材や径5cm程の丸材等で、仕口は包込ほどに仕上げている。

【堆積土】側内堆積土は2層に細分され、黒色粘質シルトや黒色シルトが自然堆積している。その他、抜取穴は2層、掘り方埋土は8層に細分された(第15図)。

【出土遺物】側内堆積土からは土師器甕や須恵器甕、磨石、モモ核(写真図版7-13)が各々極少量出土しており、掘り方埋土からは土師器甕や須恵器甕が1点ずつ出土している。また、井戸側の裏込め石とともに近世陶器(写真図版7-14)や須恵器甕が出土している。



第15図 SE23 井戸跡

その他の構造・整備					
構造名	方向	施設長(m)	幅(m)	深さ(m)	備考
SD10「N-32°E」	S	21.8	2.4	0.3	複数箇所から近現代の歴史が 出土、埋蔵土も良土に近く 有る。
SD11「E-40°S」	E	14.9	1.9	0.2	出土、埋蔵土も良土に近く 有る。
SD12「E-41°N」	N	14.1	1.3	0.2	近現代の溝跡の可能性 が高い。
SD13「E-43°N」	N	2.3	0.5	0.1	
SD39「N-38°E」	E	2.2	0.5	0.2	
SD40「E-40°S」	S	1.7	0.8	0.2	
SD41「E-35°S」	S	2.1	0.5	0.2	
SD42「E-4°N」	N	1.6	0.3	0.2	
直線部分					
SK30「橋用門」	東	7.37	60.3	25.9	壁土を含む入力地の理土、土質泥炭、頂面泥炭・砂。底面に 41.9 × 36.7 × 7.4cm のくぼみ



品種	種別	出土層位	特徴	上種	底種	器形	残存
1	追重器	蓋	堆積土	宝珠形ツマミ			破片
2	追重器	側面	堆積土	内・外画:ロクロナデ			破片

第16図 SK30 土壠出土遺物

第IV章 考察

古代の土器の年代的位置付け

今回出土した古代の土器には土師器壺・高台皿・甕、須恵器壺・高台壺・鉢・壺・甕があるが、まとまって出土したのはSK21 土壙のみで、全体の出土量も少ないとから、ここでは種類ごとの分類は行わず、遺物を図示したSX20 竪穴状遺構及びSK21 土壙出土土器について遺構ごとに年代を検討することとする。

[SX20 竪穴状遺構出土土器]

堆積土中から須恵器壺・高台壺・甕の他、非クロクロ調整の土師器甕が出土しているが、いずれも破片が多く、図示できたのは須恵器壺・高台壺のみである。土師器壺類は出土していない。

須恵器壺・高台壺は体部から口縁部にかけて直線的に外傾して立ち上がっており、壺内面の立ち上がり部にヘラ状工具があてられ、その部分が沈線状になっているものもみられる（第9図2・4）。壺の底部調整はヘラ切りや静止糸切り後、手持ちケズリされるものと、ヘラ切り後無調整のものがあり、高台壺は回転ヘラケズリ調整されている。胎土は砂粒を多く含み器面の粗いもの（第9図1・3）と緻密で平滑なもの（2・4）とがあり、後者の器面には火燐が認められる。これらと同様の特徴を有するものとしては、8世紀中葉頃とされる大衛村萱刈場窯跡 S R 2・3 窯跡（宮教委：1995）や天平11年（739）を前後する頃とされる色麻町日の出山窯跡群C地点第Ⅲ群土器（色教委：1993）等に類例が求められることから、本竪穴状遺構出土土器についても概ね8世紀中葉頃のものと考えられる。

[SK21 土壙出土土器]

クロクロ調整の土師器壺・高台皿・甕、須恵器壺・高台壺・鉢・壺・甕が出土している。これらは人为的埋土層から出土し、一括廃棄されたものであり土器の年代が土壙のおおよその廃絶時期をさすものと考えられる。

壺類では、須恵器壺が主体を占め、底部から口縁部にかけて直線的に外傾して立ち上がるものと、底部から内湾気味に立ち上がり、口縁部がやや外反するものなどがある。底部調整は殆どが回転糸切り後無調整のもので、胎土はいずれも緻密である。焼成は第11図6を除き、やや不良のため軟質であり、5・7・8・10には焼けハジケが認められる。土師器壺は少量で全体の器形を知り得るものはないが、すべてクロクロ調整で外面に回転ヘラケズリや手持ちヘラケズリ調整されているものがある。器形や調整技法上、これらと同様の特徴を有するものとしては、9世紀第3四半期頃とされた多賀城跡SI2375b 出土土器（宮多研：1997）や9世紀後半とされる同SK2321 第2群土器（宮多研：1996）、多賀城市山王遺跡多賀前地区第3群土器（宮教委：1996）、古川市高幌遺跡SI33 住居跡出土土器（古教委：2001）等に類例が求められ、本土壙出土土器についても概ね9世紀後半頃のものと考えられる。

第V章　まとめ

【古代】

1. 挖立柱建物跡1棟、竪穴状遺構1基、土壙2基を検出した。
2. 遺物は、土壙や竪穴状遺構の堆積土中等から、土師器、須恵器、鉄製品などが整理用コンテナで4箱出土している。
3. SX20 竪穴状遺構の堆積土中から出土した遺物は、須恵器環・高台環・甕、非口クロ調整の土師器甕がある。環の器形や底部の特徴等から8世紀中葉頃のものと考えられる。
4. SK21 土壙から出土した遺物は、土師器環・高台皿・甕、須恵器環・高台環・鉢・甕・甕などがあり、环類の器形や調整技法の特徴等から、9世紀後半頃のものと考えられる。

【近世】

1. 区画溝跡12条、掘立柱建物跡8棟、井戸跡1基、小溝12条、ピット多数を検出した。
2. 遺物は、区画溝跡の堆積土中等から陶器等が極少量出土したのみである。
3. 区画溝跡は掘立柱建物跡群を区画したものと考えられ、区画溝跡や建物跡はそれぞれに重複がみられ、改修や建て替えが何度も行われている。
4. 井戸は木組みの井戸側が据えられており、側の外側に河原石を込めて固定されている。

【参考文献】

- 大衡村教育委員会 1995 『亀岡遺跡』大衡村文化財調査報告書 第1集
北村 信・大沢 稔
・中川久夫 1983 『吉岡地域の地質 地域地質研究報告（5万分の1図幅）』地質調査所
色麻町教育委員会 1993 『日の出山窯跡群－詳細分布調査とC地点西部の発掘調査－』
色麻町文化財調査報告書 第1集
東北学院大学
考古学研究部 1979 『亀岡遺跡発掘調査報告』『温故』12
古川市教育委員会 2001 『高幌遺跡』宮城県古川市文化財調査報告書 第29集
宮城県教育委員会 1985 『中峯遺跡発掘調査報告書』宮城県文化財調査報告書 第108集
宮城県教育委員会 1989 『一里塚遺跡』『亘理町三十三間堂遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第131集
宮城県教育委員会 1990 『一里塚遺跡』『天皇寺遺跡』『寂光寺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第135集
宮城県教育委員会 1991 『蒲切沢遺跡』『館南四遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書 第144集
宮城県教育委員会 1995 『並列場窯跡』『下草古墳跡ほか』宮城県文化財調査報告書 第166集
宮城県教育委員会 1996 『亀岡遺跡』『下草古墳跡ほか』宮城県文化財調査報告書 第169集
宮城県教育委員会 1996 『山王遺跡IV－多賀前地区考察編－』宮城県文化財調査報告書 第171集
宮城県教育委員会 1999 『一里塚遺跡－第44・47次発掘調査報告書－』宮城県文化財調査報告書 第179集
宮城県多賀城跡調査研究所 1993 『多賀城跡第62次調査』宮城県多賀城跡調査研究所年報 1992
宮城県多賀城跡調査研究所 1996 『多賀城跡第66次調査』宮城県多賀城跡調査研究所年報 1995



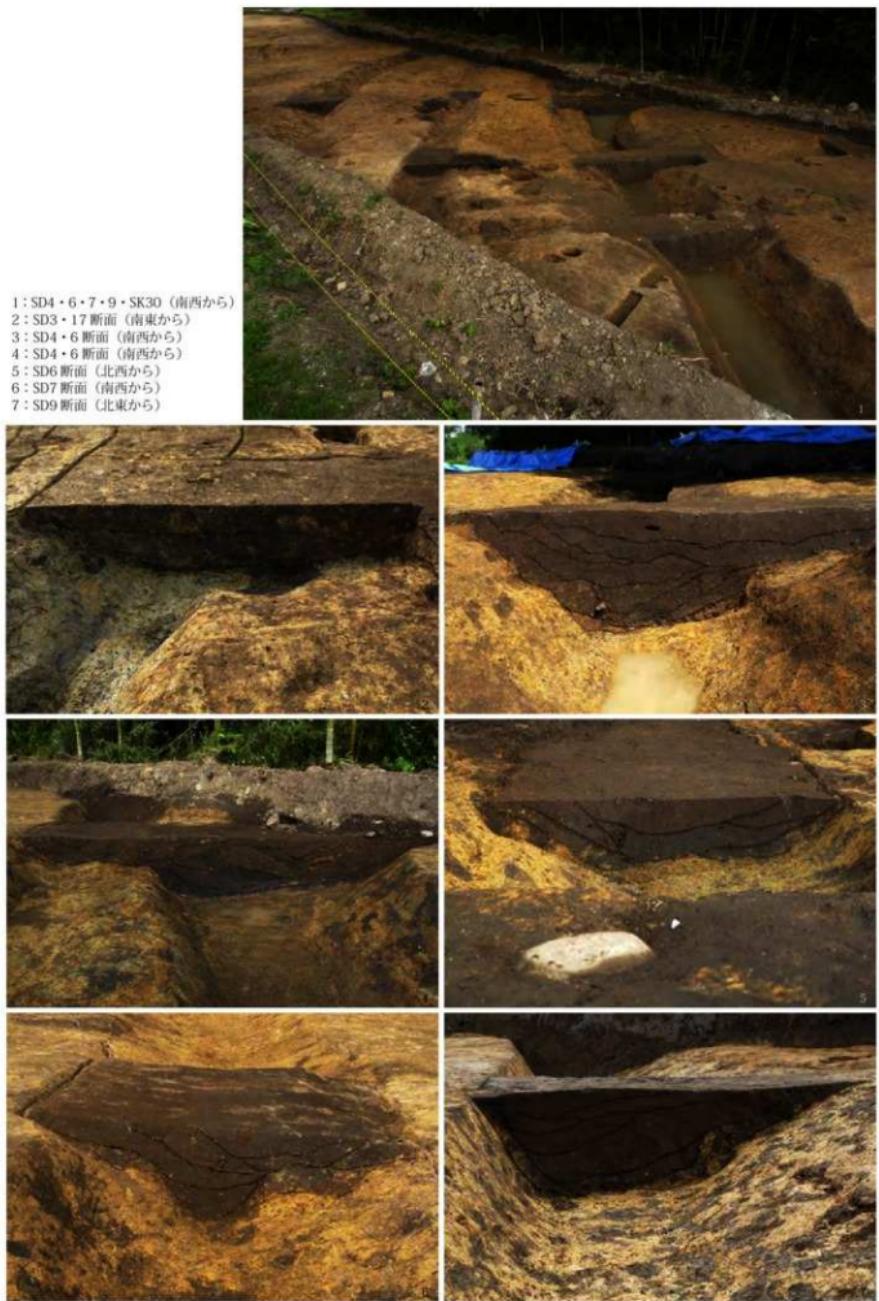
道路遠景（北東から）



国道4号線と調査区（北から）



図版 2



図版 3

- 
- 1 : SX20・SK21・SB22 (北西から)
2 : SX20 ダメ押し (北から)
3 : SX20 断面 (東から)
4 : SK21 (東から)
5 : SK21 断面 (南から)
6 : SB22 (北から)
7 : SB22N1E1 断面 (東から)
8 : SB22S1E1 断面 (南から)
9 : SB22S1W1 断面 (東から)
10 : SB22N1W1 断面 (東から)



図版 4



- 1: 調査区南側ピット群（南西から）
2: SE23（西から）
3: SE23 断面（南から）
4: SE23 井戸側と裏込石（西から）
5: SE23 井戸側と裏込石（南西から）
6: SE23 井戸側（南西から）
7: SE23 完掘（東から）



図版 5



図版6



1

- 1・2:第11図11・12 14:SE23
 3・6:SE23井戸側(側柱) 15:SD2
 7・10:SE23井戸側(棟) 16:SD4
 11・12:SE23井戸側(側板) 17・18・20・21:SD6
 13:モモ核(SE23) 19:SD1
 14～22・24:陶器 22:SD9
 23:瓦(SD11) 24:SD18
 (3・12:S=1/10 その他は1/3)



2



図版7

報告書抄録

ふりがな	とうほくちはうせいびきょくかんれんいせきはくつちょうさほうこくしょ						
書名	東北地方整備局関連道路発掘調査報告書						
副書名							
巻次							
シリーズ名	宮城県文化財調査報告書						
シリーズ番号	第211集						
編著者名	佐藤憲幸・小野卓太郎						
編集機関	宮城県教育委員会						
所在地	〒985-0874 宮城県仙台市青葉区本町三丁目8-1 TEL022-211-3682						
発行年月日	西暦 2007年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 ***	調査期間	調査面積 (m)	調査原因
ぬのめいせき 布日遺跡	みやげんとめし 宮城県登米市 とよまちのとよざひのと 登米町日野渡字日野渡	04212	52007	38度 40分 17秒	141度 15分 57秒	2005.8.29~31 2006.4.24~6.16 11.6~11.17	確認調査 事前調査 三陸震災自動車道桃生登米道路建設に伴う事前調査
すがのさわいせき 菅ノ沢遺跡	みやげんこうかわぐんとみやまち 宮城県黒川郡富谷町 こくあざがのさわ 穀田字菅ノ沢・花ノ沢	04423	25021	38度 22分 36秒	140度 53分 21秒	2005.9.29 11.7~11.8 2006.7.3~7.7 7.18~7.27 11.17	確認調査 事前調査 約650m 仙台北部道路建設に伴う事前調査
せうじゆわらやはづれ 旧大衡役場前 いせき 遺跡	みやげんくわいわらわらひ 宮城県黒川郡大衡村 おおひらわらのほたけ 大衡字野畠	04424	26070	38度 27分 29秒	140度 52分 43秒	2004.9.6~9.9 事前調査 2006.8.21~10.17	確認調査 約1,600m 一般国道4号富谷大和祇園工事に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
布日遺跡	集落跡	縄文時代・古代・中世	井戸跡16基 土壤7基 遺物包含層1箇所	縄文土器・石器・土製品・ 土師器・須恵器・ 木製品・金属製品			
菅ノ沢遺跡	散布地	縄文時代	溝跡2条	縄文土器・石器			
旧大衡役場前 遺跡	集落跡	古代	掘立柱建物跡1棟 壁穴状遺構1基 土壤2基	土師器・須恵器・金属製品			
	集落跡	近世	区画溝跡12条 掘立柱建物跡8棟 井戸跡1基 ピット	陶器			